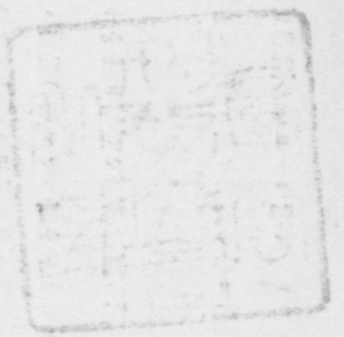


刑政月刊

二十二月號



流

刑務訓

- 一、聖旨ヲ奉戴シ盡忠奉公克ク其ノ職域ニ於テ聖業ヲ翼賛シ奉ランコトヲ期ス
- 一、堅忍持久艱難ヲ克服シ率先範ヲ垂レ受刑者ヲシテ光榮アル皇國臣民ニ復歸セシメントコトヲ期ス
- 一、官紀ヲ重シ上命下服協和一致克ク刑務官精神ヲ昂揚シ寡ヲ以テ其ノ重責ヲ果サンコトヲ期ス

受刑訓

- 一、我等ハ無疆ノ皇恩ニ感謝シ皇國ノ道ヲ體得シ心身ノ修練ニ努メ光榮アル皇國臣民トシテ更生センコトヲ誓フ
- 一、我等ハ明朗以テ作業ニ精勵シ勤勞報國ノ誠ヲ效サンコトヲ誓フ
- 一、我等ハ同胞親和ノ本旨ニ遵ヒ紀律ヲ守リ禮節ヲ重シシ團體精神ノ昂揚ニ邁進センコトヲ誓フ



月刊

主 張



政 刑

娶々たる冬の日輪は空に輝き一億の民、生死を賭しての聖戦は早くも第三年に入る。顧みれば大詔喚發の其の日より我等草莽の生命は國家に奉せられしものにして自分のものではなく、幾多の臣民は家業を捧げ或は知能と青春を捧げ、父を子を友を祖國防衛の爲に莞爾として捧げて來た。この嚴肅なる國の動きを見るにつけ我等銃後にある者の生活態度に一點のゆるみなかりしやを三思する念は愈々深いのを覚えるのである。我等の日常は果して祖國を護り拔き壯大なる日本を建設するにふさはしい新しき意志と熱情に満ちてゐたかどうか。殊に決戦下刑務官として果して最後の一人をも救ひ萬人をして處を得せしめるべき道義日本の刑政の完遂に全知全能をかたむけて努力して來たかどうか。戦時下官吏の一人として果して私に背き公に奉ずるの道に一抹の曇りもなかつたかどうか。是等の反省なしに我々は一步も前へ進めない事を思ふべきである。

遠い南方構外作業に挺身して汝々として倦まず或は造船に造機に土木にはた又農耕に萬難を越え收容者と共ニ營々といそしみはげむのは確に屍を殉忠の血に染めて闘ふ前線將士の勞苦にも比すべき立派な職域奉公である。然し是で刑務官の使命をはたきつたと考へてはなるまい。我等の眞の使命はまだ、その先に續く人間救済と、刑政理想の實現にいたる。はるかなる廣がりを持つ事を思ふ必要がある。人を指導し救ふと云ふ事は自分自身を捨てなければ絶対にない仕事である。この不可能にも似た荆棘の道を我々はやりとげようとする。刑政の本義はつづまるところ仁愛の二字につき、しかもこの刑政の確立なしに祖國の必勝は亦ありえない。沸々としてたぎる止むに止まれぬ熱情を以てこの日本刑政の顯現、推進しようではないか。

昭和十八年 重要日誌

- 十月三十日 △チャンドラ、ボース氏來朝
- 十一月一日 △戰時行政職權特例改正 地方行政協議會機能強化勅令案公布 △新設三省、各省新機構實施、東條軍需、八田運輸通信、山崎農商相親任、△ブーゲンビル島沖海戦、△赤軍クリミヤ半島ケルチに上陸
- 十一月二日 △洞庭湖西方に新作戦開始 △獨、印度假政府承認
- 十一月五日 △大東亞會議開催△ブーゲンビル島沖海戦
- 十一月六日 △大東亞共同宣言發表△獨軍キエフ撤收
- 十一月七日 △大東亞結集國民大會開催
- 十一月八日 △アキヤブ作戦部隊、古閑兵團、協力部隊の感狀上聞に達す
- △第二次ブーゲンビル島沖海戦
- 十一月十一日 △ソロモン海域に於ける聯合航空部隊の偉功御嘉尚、勅語を賜ふ △第三次ブーゲンビル島沖海戦
- 十一月十二日 △英内閣改選
- 十一月十三日 △十八夏太行作戦に殊勳の大津部隊の感狀上聞に達す △第四次ブーゲンビル島沖海戦
- 十一月十四日 △交換船帝亞丸歸る
- 十一月十五日 △獨軍ジトミール撤退
- 十一月十六日 △第一次ソロモン海戦 夜戦部隊の感狀上聞に達す △キスカ島守備和田高射砲中隊の感狀上聞に達す △獨軍レロス島完全占領
- 十一月十七日 △大東亞新聞大會開催 △藤原銀次郎氏國務大臣に親任 △内閣顧問に鈴木、鮎川、五島三氏發令、△第五次ブーゲンビル島沖海戦、空母三、巡艦等四隻撃沈
- 十一月十九日 △物價政策の運籌決定
- 十一月二十日 △南太平洋海戦に偉勳の機動部隊、航空部隊の感狀上聞に達す
- 十一月二十二日 △第一次ギルバート諸島沖海戦
- 十一月二十五日 △第三次ソロモン海戦攻撃部隊の感狀上聞に達す
- 十一月二十六日 △臺灣に敵機來襲
- △第二次ギルバート諸島沖海戦
- 十一月二十七日 △第三次ギルバート諸島沖海戦、マキン島、タラワ島、守備と連絡杜絶

目次

主 張	張	表紙繪(冬枝宿眠) 初山 滋
刑政の精神	正 本 亮(三)	
統一と調和	林 隆 行(四)	
ジャワの事情に就いて	安 達 勝 清(六)	
片隅の記	佐 藤 民 實(九)	
東京造船部隊視察	鈴木文史郎、吉川英治、正木亮、安達勝清、長部(三) 謙吾、小川太郎、掛樋部隊長	
座談會(一)		
死の覺悟	伊集院 哲(六)	
伊裏切の真相	原 祐 三(四)	
交友記(二)	石塚友二(三)	
樂聖ベートーベン(一六)	例 規(三)	
俳壇・歌壇(一七)	刑務官異動(一)	



刑政の精神

正木 亮

私は去る十一月一日から司法省刑政局長に就任することになりました。司法省の刑政局といふ新しい局は従来の行刑局と保護局とを一緒にした新局であります。従來の行刑局がひたすら自由刑の執行を取扱、保護局が釋放者の保護や執行猶豫者乃至起訴猶豫者の保護指導を取扱つて居たものを此の新局は自由刑の執行をすると同時に釋放者やその他の犯罪者のことまでも世話を焼くことになつたのであります。

二つの局の仕事が一緒になつたのでありますから誠に多忙にはなりましたけれども、私としては實に嬉しい忙しさを感じております。それは、行刑上刑務所の收容者を色々手がけたあげ句に、その子がどうなつたかわかりかねるやうな別れ別れの行政上の仕事と一緒に統合されて、自分の子供の行末をたのしむことの出来るやうになつた此度の行刑と保護との統合、どんなに忙しくとも私は喜んで私の生命をうち込んで行き度いと思ふのであります。

抑も行刑と保護とは一卵性の双生児のやうなものであります。否一體同心といつた方がよいかも知れませんが、刑務官も保護官も共に道に踏み迷つた者たちを眞の日本人にたち還らせやうといふ目的に於ては從來と雖全く同じであつたのであります。御座いますが病人も乞食も犯罪人もそれが日本人である限り之を憐れませ給へるが爲であります。悪い弱い子程可愛いといふあの親心をお示しなされたのであります。この大御心を拜戴してその御精神に立脚して犯罪人を扱ひまする以上刑務官や保護官としてどうして彼等の將來をよかれと思はぬ者がありませう。罪を憎んで人を憎まずといふ格言があります。それは日本政治の根本であります。行刑と保護との基本精神でもあります。

かやうに行刑と保護とは御仁愛の精神に基いて一人の邪しまたな者をも更生せしめやうとするのでありますから、之に對して受刑者や被保護者はこの厚き御恩寵に生命を以て酬ひ奉るべきことは當然であるのみならず、この恩寵に背き、又馴れるやうなことがあるなればそれこそ罰が當ります。かやうな心持を以て行はれる行刑と保護の下に於ては何人も言あげ出来るものではないと思ひます。私の経験によつて日本の受刑者、日本の被保護者はそれが日本人である限りその罪を悔ひ、罪を犯せば犯すほど自らを責め、せめてはお國の爲に働きまつらん心を起こさない者は一人もないことを堅く信じて居ります。

受刑者はあてにならぬとか、犯罪者は利己主義だと、いひ又考へる人はほんとうに人の心理をつかむことの出来ぬ人であります。私は信じます。日本人は罪を犯したその瞬間に於て刑務所に入つたそのときに於て非常に悔ひ、自分を捨てても惜しくないといふ心に囚はれることを看取し得るのであります。この日本人の特性を掴むことなくしてどうして人を更生せしむることが出来ませう。この心理を把握すること能はずしてどうして一人の當を得せしめてやる事が出来ませう。

ります。裁判や檢察の面に於きましては刑罰は威嚇であつとか、刑罰は應報であつとかいふ様な議論も起りますけれども、行刑と保護とに於ては全く彼等を日本人といふ大御寶に更生させることに目的は歸一するのであります。罪を調べる人、ちはその罪をにくむが故に刑罰の應報とか威嚇といふ議論をいふことが出来るのでありますけれども、人を扱ふ人たちには人を憐れみ人を慈み人を育む以外に目的はないのであります。そうすることが即ち日本政治の大道であります。大御心に添ひ奉る所以でもあるのであります。

明治元年の詔書に億兆一人そのところを得ざる者あるときは皆、朕が罪なりと仰せられましたがこの大みことのりを拜誦する限りの日本人を取扱ふ人たち、お醫者さん、行政官、刑務官、保護官何れもこの貴い、大みことのりの御精神を奉戴しなければならぬのであります。お醫者さんは一人の患者も居らぬやうに治療すること、行政官は一人の乞食の居ないやうに善政を敷くこと、刑務官は一人の累犯者も出ないやうにそして保護官は累犯を撲滅するやうに努力を拂はなければならぬのであります。

なせ明治天皇様はかやうに一人も處を得ない者がなくやうにと仰せられたので、昨年の十一月八日わが國では行刑造船奉公隊といふ制度が出来ました。日本の受刑者は祖國の國難に際して一番自己を捧げることの出来る人間であるといふ、前提の下に從來豫想だにされなかつた自由と自治とが興へられたのであります。ところが彼等は實によくこの親心を感じて滿一年を経た今日に至るまで殆んど一人の逃走もなく懸命に皇國輸送戰の爲に造船にいそしんで居るのであります。今日では全國津々浦々の造船所の中に造船奉公隊が働くやうになりました。が、受刑者がかやうに刑務所の壁の外で働くこと、而も全く見張のない状態の下で働いて居ることに對して世の人々は少しも非難を致しません。否寧ろ自由刑をさういふやうにしむけることが當然かのやうにさへ仰せらるる人さへあるやうになりました。

世論をかやうに導きますことは刑務官が受刑者の日本人意識をよく看破して日本人らしい仕事を見付けてやつたからではありませんけれども、同時に受刑者たちがその處を得た感激から懸命に働き出したことにも原因するのであります。要するに役人が眞に彼等を信任しそして彼等は心からその信任に答へるといふいはば仲のよい親子のやうにピッタリした氣持の下に行はれる行刑と保護とが行はれるならばそこに刑務所などは不用になつて来ることもあり得るのであります。

昔の人が刑は刑なきを期すると言つて居りますが、それは決して夢ではありませんでした。大東亞戰爭下に於ては役人が受刑者を信頼し、受刑者が役人に迷惑をかけないやうにして實に眞誠に働くやうになりました。この熱心この誠意をつづけることが今日の刑政の眞の精神であります。



統一と調和

林 隆 行

統一と調和

美學上、統一と調和とは美の要素であると稱せられ、古くは俳匠芭蕉も「不易、流行」の語を以て之を説明して居る。即ち「不易」とは、永久に變ることなく持續されるの謂ひで、前記統一の縦の面を意味し、「流行」とは流き行はるゝことで、今日の「時代に應ずる變化」とか「時局即應」とかいふ言葉に相當するもので要するに、不易に貫かれつつ之を中心として、而も其時代の必要に應じて變化し對應すべし。結局前記統一と調和を指すに外ならない。

尤も此の統一と調和とはもともと表裏一體の關係に立つもので、統一なくして調和なく、調和なくして統一が成立たないのであつて、統一が現はれ生かされる方向は變化の中であり、調和が保たれ守られる方向は統一の中であるが、美の要素としては之を別個に觀念すべしと出来る。

併し統一と調和の重要視されるのは單に美學の上に於てのみならず、凡ての事に物々に共通する所であつて、如何なる物に於ても統一と調和を欠くときは、決して其の機能を完うする事が出来ないし有終の美を發揮し得ないのである。

之を國體に就て見んに、萬世一系の天皇を中心として統一と調和の極致をなせし我國體は、萬國無比、世界の欽仰と深望の的となつてゐるに反し、支那に於ては、之を欠くが故に「支那には民族あれども國家なし」とさへいはれて輕視されてゐる。

之を民族精神に就て見んに、萬世一系の國體と家族國家の特質より生れ出でたる我八紘爲宇の大精神は、科学や主義の域を飛躍して固き信念に迄進展し、不幸なる東亞民族の爲に自らの大なる犠牲を拂ひつゝも、大東亞建設の目的に向つて奮進し、爾餘の大東亞各民族も亦皇國と運命を共にすべく和衷協力して立上つてゐるに反し、個人主義、自由主義に立脚せし英米世界觀は、單に自らの國家のみを以て中心とし、國體の利益や生存權を犠牲にして今次大戰を遂行するが故

言ふ迄もなく、我國は今や國を賭して大東亞戰爭を闘ひつゝあるのであるから、國民の一舉一動凡て大御心を體して聖戰の完遂に統一されなければならぬこと勿論である。茲に於てか刑政界に於ける作業も、事刑務關係に屬すると保護關係に屬するとを問はず、從來の刑務所又は保護關係の歴史や傳統をすて、正に決戦の爲に最も必要な産業に集中せられ、受刑者も被保護者も、造船、造器、飛行機等の重要軍需作業に向つて奉公隊、挺身隊、工作隊の各隊員として奉公挺身する機會を與へらるるに至つた。

此の事は隊員側より觀れば、囚はれの身なるが故に又、法の繩束をうくるが故に、此の國家の重大時機に際し、戰爭に關與し得なかつた悲しみが一朝にして解消せられて、聖恩の鴻大無邊に感激し、其に決死隊員たるの覺悟を以て作業に挺身する結果、工場側其の他を驚嘆せしむる好成绩を擧げつゝあると共に、此の「行」を通して自らをして良き日本人への復歸を促進せしめることとなつた。他方之を指導者側より觀れば、受刑者並被保護者も、其に之を愛し心の中よりの信頼を與ふれば、換言すれば信頼といふ心理的統向を以てするだけでも、驚くべき好成绩を以て彼等の改善を期し得るといふ新しき、戒護方法、指導方法を體得すると共に今や彼等の逃走や反則に對する懸念をすて、寧ろ彼等と相携へ彼等を保護し激勵しつゝ聖戰完遂の一翼を担當するに至り、茲に率あるものと稱するものとの渾然一體の實を擧げつゝあるのである。

此關係は單に指導者と隊員との關係に止まらず、各工場に於ては、工場長を始め工場職員と之等隊員との關係は、實に尊敬と友愛、命令と服従、指導と感謝、見るも涙ぐまじき人情の融和を示してゐる。さればこそ工場側に於ては、從來の認識を改め、犯罪前歴者に對する門戸閉鎖の鐵則を取除き、奉公隊員中の釋放者は、無條件に其の工場で採用する事となつて、長らく工場側と犯罪前歴者との間に設けられてゐた牆壁は見事に撤廢せられ、渾然たる調和を實現するに至つた。

要するに、最近の刑政作業は、元の行刑に屬すると保護に屬するとを問はず其の方向、於て軍需作業へ統一せられ、而も軍需工場側と、隊員、隊員と指導者との間には、從來未だ嘗て見られなかつた調和が確立し、此の統一と調和の結果作業上精神上に大なる好成绩を收めつつあるのであるが、之は構外作業より構内作業にも擴大され今や刑務所内の作業も一大轉換をなすべく進路をとりつつあるに至つた。

かくて刑務所や保護團體が、其の便益や傳統により作業を引きずる形態は影

に此大戰途上に於ても英米ソ並反輻軸民族間に於て相剋磨擦の網間がない實情にある。

斯の如く統一と調和が、凡ての事物を通して其の機能を完うし其の美を發揮するに缺くべからざる要素であるが、茲には一々之を考察する餘裕を持たないので、先づ私の身邊なる刑政界最近の特殊な事例に付き觀察して見ることにしたい。

其の一は今回實施せられたる刑政局の誕生である。私は嘗て數年に亘り司法保護の仕事にたつさはり、現在では行刑の仕事に従事してゐるが、其の本質上より見る時は司法保護も教育であり行刑も教育であつて兩者其軌を一にしてゐる。

而も、最近、社會が戰時態勢へと急轉換するに従ひ行刑及司法保護の態勢も之に即應する必要に迫られて、共に聖戰完遂を目指して進むが故に前記本質の外に目標手段を同うするに至つた結果或は行刑の中に於て司法保護の作用を行ふかと思へば、他方司法保護の中に於て行刑類似の仕事をする様になつたのは已むを得ない現象であつた。

此の事は刑務所の造船奉公隊に於ける就職斡旋や保護官廳たる矯正院の仕事を通觀すれば、思半に過ぎるものがあらう。更に兩者共、其の本質が教育なる關係上、其活動部面に重複を來すことも已むを得ないことであつて、司法保護に於ける職員並對象者の鍊成と行刑に於けるそれとの如きは其の顯著な一例である。加之豫防拘禁所の如き兩者の性質を兼ねた官廳の發生を見るに至り益々此の兩局の統制整備の必要を感じられてゐたのであるが、時來つて本年十一月一日、右兩局は茲に發展的解消を遂げて、新に誕生した刑政局に統合せられ、正に前記統一調和の原則を具現するに至つたのである。殊に其の機構の新編成に於て將又人的融和の美に於て間然する處なき現狀に於ては益々有終の美を發揮される事であらう。其の二は、之を刑政局内に於ける作業の調期的轉換に於て見る事が出来る。

ひそめ、作業の重要性は作業統制の政治力と結んで逆に刑務所や保護機關を引きずる傾向を示し、之が更に進展すれば、或る重要作業遂行の爲は、刑務所や保護機關の統合移轉の必要をさへ痛感される状態にある。

私が此の刑政作業に就き何故斯くもくどくしく書くかといふことに疑念を懐かれるかも知れないが、それは此の刑政作業の現況が、やがて我國勞働運動の先驅となり刑政作業に於ける受刑者又は被保護者の精神と活動態型とは、我國勞働者の精神並活動態型を統一する傾向を示してゐるからである。而もそれは、從來の如き階級闘争の方法に依るに非ずして統一と調和のとれた總攬和の下に、純日本式の勞働態型より勞働體系の形成へと進むものと思はれるからである。現に某刑務所の飛行機部分品製作、作業は、正に此の典型的なものとして、軍官民の各方面より推稱されてゐるとの事であらうから、私の此の見透しもあながち妄想のみ言ふことは出来ないと思ふ。

以上によつて刑政界に於ける統一調和の事例の一端を述べたのであるが、併し此統一と調和への進路をとれるものは、前に冒記で述べた通り單に刑政界のみに止らずして、苟も進歩發展しつゝある宇宙の事に物、悉く然りである。何となれば統一と調和は事物の發展過程に於ける欠くべからざる要素であるからである。

從て我國全體の動向も之と其の軌を一にしてゐることは當然である。さればこそ米英の侵略政策と壓迫に對し自存自衛の立場より今次戰爭に立上つた我國は、其の八紘爲宇の大精神に則り、自己の自存自衛のみならず、從來米英の蹂躪下に虐げられ植民地化せられてゐた東亞諸民族を救済せんとして、自己の犠牲に於て米英の勢力を東亞より驅逐し、遂に今回大東亞各國家、各民族代表者を會して大東亞會議を開催し、共存共榮、獨立親和、文化坵場、經濟繁榮、世界進運貢獻の五原則を宣言し、「大東亞の爲の大東亞建設」の基礎を固め、更に引續き大東亞新聞大會を開催して大東亞に於ける思想戰の統一調和に成功した。これは取りも直さず皇國の理想に基き、八紘爲宇の大精神に源を發する大東亞建設に對する統一と調和への進展に外ならぬ。而も此精神は東洋思想の特質たる調和の代表的なものであるから、現に我が仇敵たる英米と雖、若し過去に於ける罪惡を衷心悔悟し、其に人類平和の爲に道義の帝國方針に協力せんことを誓ふならば、彼等に對しても愛の手を差し延べ之を調和する事に吝でない。

かくて光は東方より今や大東亞に照覽し、而も更に光は大東亞より西歐へ、進んで全世界へと遍く光被するに至るであらうし、茲に至れば、統一と調和も亦人類平和の上に、將又人類文化の上に、偉大なる足跡を残すこととならう。



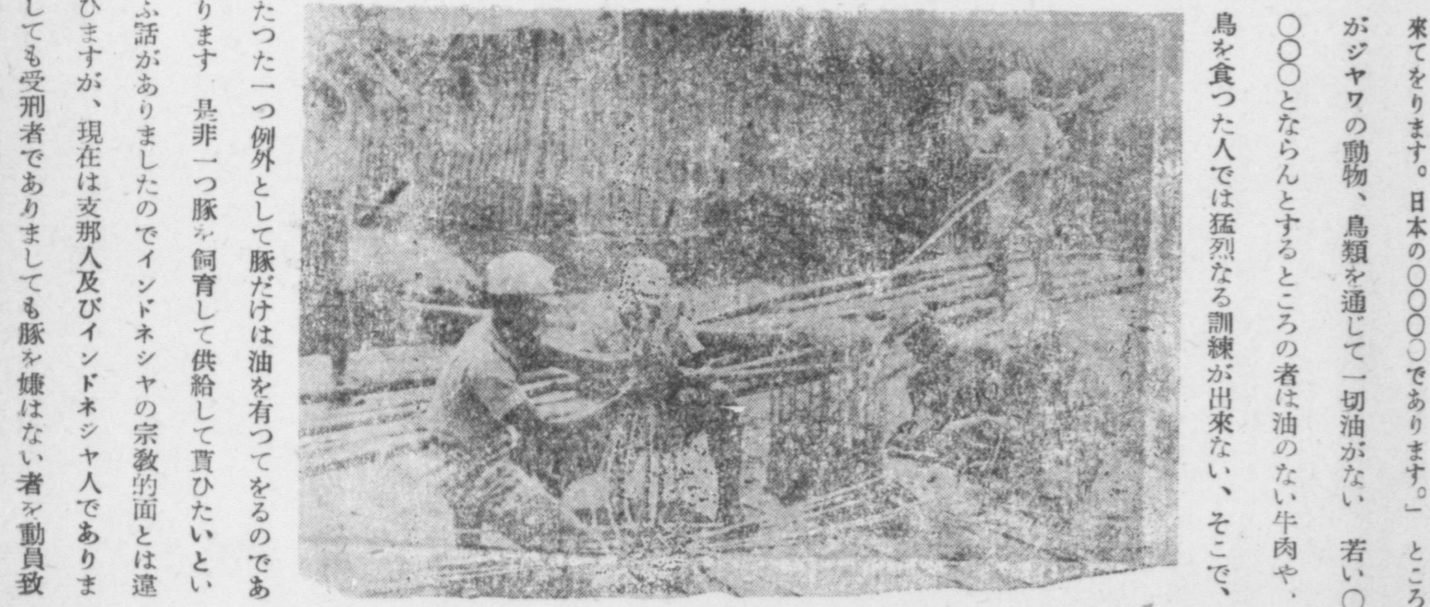
ジャバの事情に就いて(三)

陸軍司政長官 安 達 勝 清

ところが全員悉く使命を完全果たしましてさうし
て歸つて来たのであります。なにしろ五萬六千人の受
刑者が當時は無作業の状態でありまして、その爲に非
常に病人も續出して困難してをりました。これらのも
のが各獨居房と言はず雜居房と言はず雜然として集禁
されてをりますのみならず、この受刑者達の頭の中
には愈々自分達も日本軍の手によつて首を斬られるや
うなことがあるのではなからうかといふ懸念も有つて
をつたやうに聞いてをるのであります。さういふとこ
ろへ敢然として乗込んで僅か三十名足らずの刑務官が
この難關を突破してしまつたのであります。所謂先遣
刑務官達はものみごとにこの隘路を突破致しまして
後で映画で御覽になるやうに秩序整然たる日本式行刑
が今日既に出来上つてをるのであります。私はこの
先遣部隊の、この涙ぐまじき重大なる使命達成に對し
ましては皆さんに於かれまして、どうか敬意を表し
てやつて頂きたいと存ずる次第であります。現在の收
容人員は〇〇所の刑務所にそれ〇〇收容してあります
受刑者、未決合計〇〇〇〇。その外に敵性濃厚なる關
りしました。しかし半年後に又同じ刑務所に行つて見ま
するといふと今日は全く別人の感を拘かしめる程の朗
かな受刑者に變つてをるのであります。この間少數の
人とは言へ、わが内地から派遣されましたる刑務官の
努力はそれだけでも業績が擧つてをると私は確信して
をります。現在刑務所の作業は軍補給所の役割を完全
に果たしてをります。即ち軍の註文を受けてその作業
を完成してをるのであります。現在やつてをります刑務
所の作業の種目を申し上げますといふと、先づ第一は食
糧増産。これは世界第三位と謂はれたジャバのサ園を
目下潰してさうして食糧増産に全精力を傾倒してをる
のであります。このサ園の開墾が今日では〇〇〇〇ヘク
タール。そこに米 落花生 玉蜀黍 甘藷 大豆、タ
ピオカ かういふものを植えてをります。

次に家畜の飼育であります。現在刑務所では牛五百
七十頭、豚九百九十六頭 大體一千頭近く 後で時間
があつたら申したいと思つてをりますが、インドネシヤ
は豚を扱ふといふことが絶對禁物になつてをります。
それは、回教の方から來た宗教的な慣習でありますか
らして例へば私共の家にをりますコックに豚の料理を
させますといふと彼等は絶對に その豚に觸らないや
うにして長い箸を持つて來て恐る／＼料理をするやう
なことになつてをります。丁度現地、於きまして「〇
〇〇〇〇〇が設けられまして〇〇〇〇〇〇の生徒がそこに

の籍を離れてオランダ人になつたやうな氣持を多分に
有つてをるのであります。従ひまして彼等が日々刑務
所に於いて取扱ふところの同胞を恰かも異民族の如く
考へて取扱ふのであります。私は刑務所も相當嚴監視
致しましたが刑務所によつて所長以下幹部に對しまし
て、必ず行刑の目的は何かと訊きます。しかし乍ら、
遺憾乍ら一人として行刑の目的に對して明答を與へた
人はありません。それに比べまして今日日本の行刑界
に於きまして如何なる刑務所に於いても看守に對して
行刑の目的は、と尋ねますと、彼等は意氣昂然と明答
するのと比較致しまして、日本行刑が如何に立派であ
るか、又行刑の先輩が如何に努力されたかといふこと
を想ひ起してつく／＼敬意を表してをる次第でありま
す。



來てをります。日本の〇〇〇〇〇であります。」ところ
がジャバの動物、鳥類を通じて一切油がない。若い〇
〇〇〇とならんとするところの者は油のない牛肉や、
鳥を食つた人では猛烈なる訓練が出来ない、そこで、
たつた一つ例外として豚だけは油を有つてをるのであ
ります。是非一つ豚を飼育して供給して貰ひたいとい
ふ話がありましたのでインドネシヤの宗教的面とは違
ひますが、現在は支那人及びインドネシヤ人でありま
しても受刑者でありまして豚を嫌はない者を動員致
しまして豚の飼育をやつてをるのであります。次は漁
撈鹽干魚の製造をやつてをります。北海岸のそれから
ジャワレンバン、ブスキ州の刑務所この三ヶ所の刑務
所に於いて漁撈鹽干魚の製造をやつてをります。大體
今日の作業人員、受刑者人員は〇〇〇〇になつてをりま
して相當の量が毎日〇〇の方へ納められてをります
次はサイザル、サイザルと申しますのは特別の纖維植
物でありまして従來砂糖袋、米袋は木綿で出来てをつ
たのであります。がこの木綿の輸入が杜絶致したので
その代用袋をサイザルによつて造つてをります。大體
このサイザル袋の作業は全島の刑務所に於いて行はし
めてをりまして年産額は五十萬袋であります。それか
ら現地に於いて用紙が非常に缺乏致しますので、スカ
ムシユキン刑務所、これは、バンドンにあります。此
處で日本紙を製造してをりますが月産六萬枚であり
ます。馬蹄、これは軍用の重大なものであります。馬蹄
が、某軍需工場に於いて造つてをつたのであります。馬蹄
が、刑務所の製作が理想的だといふので全部刑務所に
轉換して造つてをります。帽章、蚊帳 獸醫の使ひま
すメス、鋏、これらは數萬個に及んでをりますが矢張
り軍の關係で數字は申し上げ兼ねます。又現地、於き
ましてドラム罐がないので今日チーク材を用ひて代用
樽を造つてをります。その外船舶用具 空襲に對する

偽装網等を〇〇個宛軍に納めてをります
最近テガールの刑務所で特に創意工風を發揮致し
して造りましたのは救命胴衣、これは御承知のやうに
中にカボツクが入つて外部をズツクで包んでありま
す あれを着けて飛込みますといふと大體十時間は浮
いてをるといふことでありますが、これではどうも面
白くないから ジャワはゴムが腐る程あるからこのゴ
ムを工風して救命胴衣に應用したらどうかといふこと
を話しまして その工風をやりましたその結果非常に
良いのが出来まして それを着けて水の中へ入ります
ればそのゴムが破れるまでは永久に浮いてをるといふ
ことになります 今後これが普及致しますといふと敵
の潜水艦にやられた場合に或は助かる人が多くなるの
じやなからうかといふことを考へますといふと是非と
も救命胴衣は全部ゴムに包むといふ風にした方が良
いんじやなからうかと思ふのであります これも〇の方
で非常に好評でありまして〇〇〇〇の場合にこれを使
ふべく莫大な量を現在造りつゝあります 又ジャワで
特にやつてをる仕事として御紹介申し上げたいのは日
本刃であります ジャワで日本刀を造るといふのは仲
々心臓を有つ奴だといふ風に皆さん仰しやるか知れま
せんが、矢張り現地に於いて澤山な除隊兵が採用され
て來ます さうするといふと その除隊兵が手ぶらで
をる譯に行きません それかと言つてオランダが遺し

たサーベルを腰に吊つたのではどうも恰好がうつら
い、それでチミナン刑務所で自動車のスプリングを利
用しまして日本刀を考案して 最初の裡は極めてまし
いものでございましたか漸次立派なものが出来るやう
になりました その外特に申し上げてをきたいのは抑
留者中に造船技師がをりますので、この造船技師をよ
く納得させまして 自動車の廢品モーター、これを利
用して快速警備艇を造らしてをります 第一回目は一
トンの重量でありまして四十馬力の所謂飛行機のプロ
ペラ式の快速艇を造りまして これは八ノットしか結
局出なかつたのであります、が第二號は長さ十メータ
ーの三ト半の快速艇を造りまして これに對しては
百二十馬力のモーターを付けました スクリュー式で
これを組立てましたが大體十五ノットから二十五ノッ
トの速力が出る都合になつてをります その他各刑務
所の模様を申し上げますといふと、チラチャツブの對
岸にヌサカンバンといふ島があります、この島は淡路
島と大體同じ位の島でありまして、全島が〇〇になつ
てをります 此處に〇〇の倉房が出来てをりまして收
容定員が〇〇〇、世界第一の刑務所となつてをりま
す、行つてみますといふと全く豫期に反しまして非常
に氣持の良い林間公園のやうな刑務所であります、そ
こには豹もをります 鷗も澤山をります それから鹿
もをります 或る文士が行つて何か變つたものが食べ

たい、食はして呉れと言ふので、それじやあヤマアラ
シのスキヤキをやらうじやないか、ヤマアラシのスキ
ヤキをやつたとかいふ話で、洵に珍無類な御馳走が澤
山あるといふことになつてをります、それから此處に
ブレボンといふ刑務所があります、これは紡織を専門
にやつてをります、それから六十キロ上つた所にクニ
ンガンといふ刑務所がありまして、此處は染色工場
でありまして、ジャワではこれに及ぶ大きな染色工場は
ありません もう一つ、ジヨクジャカルタの刑務所で
は靴、皮専門の作業をやつてをります、スラバヤ 先
般爆撃を受けた所でありまして、スラバヤの刑務所で
はジャカルタにあるチミンナの刑務所と相俟つて鐵
工、木工の盛な刑務所であります、時間が来たやうで
ありますから、甚だ尻つ尾切れになります、まあ以
上申し上げましたのは結局ジャワ事情の片鱗を申し上げ
げた次第であります、今日の情勢は非常にむつかしい
所であります、しかし乍らジャワは非常に重要な
所でありまして、絶対に米英の反撃が届かないやうに
強い守りを附けられてをるのであります、同時に内部
的には今申し上げましたやうに軍政がその末梢に至る
まで極めて力強く浸透しつつありますので、ジャワの
事情は大平安心して可なりといふ結論に到達するので
あります、纏らないことを申しまして洵に恐縮に存じ
ます。御清聴を感謝致します。



片隅の記

佐藤民實

春の始め頃から、南平の家の床下に一匹の野良犬が寝泊りするやうになつて
た。

白と黒の斑点のある大きな犬で、昔は相當見られた恰好であつたのかも知れな
いが、ひどく毛なみが亂れて、泥だらけになつて居り、背骨の出た體をよろける
やうにして、台所を嗅ぎ廻つてゐる可愛氣のない奴である。しかも、しつと追つ
たりすると、首をもたげてぢろりとこちらを見上げるが、どろんとした老人の眼
で、かへつて薄氣味がわるいやうである。

犬嫌ひの南平は家の附近でこの犬を見つけると、自分で追つたり、妻に追はせ
たりしたが、何んとなく南平の家の床下が具合がよいらしく、追つてもく現は
れる。

一見老ひぼれてゐるやうに見えるが、實はそうではなかつたのか、いつか氣が
ついてみると、たるんだ腹をしてゐた。

「どうもあの犬は孕んでゐるらしいぞ」
南平は嫌な顔をして妻に言つたが、駄犬の腹はますく大きく垂るみ出し、孕
んでゐることはまぎれもなかつた。

「あんな犬に、家の床下で仔を産まれたらたまらないわ」

比較的呑氣であつた妻も氣にし始め、盛んに追つたが、相變らず寝泊りして
る様子で、夜半に耳をすますと、犬の動く氣配がした。

それで、床下に入れぬやうに格子でもはめようかななどと、南平は夫妻で相談し
てゐたが、いゝ案配に、いつとはなしに野良犬は姿を見せぬやうになつた。

妻はほつとして、きつと大村さんのお庭かどこかに巢を見つけたのだわと言つ
た。南平の家の前に大村さんといふ大きな屋敷があり、雑木林のあるやうな庭が
ある、大村さんのところなら書生や女中が澤山居るから仔が生れても何んとか片
付けるだらう、南平もそんなふう考へて、大村さんには悪いがたいへん氣にな
つてゐただけに、妻の言葉でほつとした氣持になつた。

しかし、實はさうでなかつた、仔を産む頃になつて、要心深くなつた親犬は、
南平の家の床下の奥に大きな穴を掘り、ちつとそこに蹲つて新な生きものの生れ
て来る日を待つてゐたのだ、その穴の眞上の疊に耳でもつけたら、野良犬の荒い
息使ひも聞えたであらうが、南平も妻も安心し切つてゐて、まったく氣がつか
なかつた。

或る朝、妻は顔色を變へて南平を起した。
「大變よ、あの野良犬が家の床下に仔を産んでゐるのよ、早く何んとかし

て頂戴な。」

「畜生め！」

南平ははね起きて、いま／＼しきりに言った。

「犬は畜生にちがいないけれど、ほんとに畜生めだわ。」

「そんな歌じやれを言ふ暇があつたら、自分で始末しろよ。」

南平は不氣嫌な顔をして着物を着た。

「一體、どこに仔を産んだんだ。」

「こよ、ほら聞えるでせう。」

便所の前の四疊半である。耳をつけてみると、なるほどグウ／＼といふ押しつけられたやうな鳴聲がする。

「大分産んだようだね。」

「ほんとに困つたわ。」

畳を揚げて床板を取り、聲のする邊りをのぞいてみたが暗くはつきり判らない。妻は早速懐中電燈を持つて來てのぞいてみた。

「あら、あそこよ。みるわ！」

代つて再び南平も首を入れ、電燈で照らしてみると、四疊半と便所の間の廊下の下邊りに大きな穴が掘つてあり、そこに重り合つて齧めてゐるのが見える。

「親犬が居無いやうだわ、丁度いゝわ、ここからもぐつて、取つて來て下さいな。」

「俺は嫌だ。」

「あたしだつて嫌だわ、こんなことは男の役目よ。」

「誰の役目であらうが、俺には出來ん。」

「そんなことおつしやつたつて困るわ。ねえ棄てて下さい。」

「お前は勇敢ぢやないか、やれよ。」

妻は白い目をして南平を睨んだ。

姿を消して行つたのである。

南平は周章で仔犬を入れた籠をひき寄せ、床下を這ひ出た。

「駄目ぢやないか。」

床から出るとすぐ、泥だらけの顔に向けて妻を叱つたが、やれやれと安堵の表情になつてゐた。

それから自轉車を借りて、仔犬を遠い原つばに乗せて來たが、それからは、野良犬は南平の家に現はれなくなつた。

その後、二度、南平は近所でその野良犬を見つけたが、野良犬は南平の顔を見知つてしまつたのか、遠くから顔をそむけ、生垣をくぐつて姿をくらました。

南平はその裏果てた姿を見て哀れだと思つた。何か罪を犯したやうな氣がして、その犬に何か負目のやうなものを感ぜずには濟まなかつた。

野良犬は、そつと家々の台所に忍び寄り、そくばくの糧を得て生きて來たのであらうが、あつちの家でしつと追はれてびつくりし、こつちの家でこら！と嗚鳴られて尻尾を垂れて姿を消す。そんな日々を送つてゐるうちに、もはや何ものに對しても、闘ふといふ氣組を失つてしまひ、自分の仔が奪はれるといふときさへ、身をひそめ去つてしまふやうになつたのであらう。

その犬のことを考へると、南平は憐憫の情と共に、妙に腹立たたしさを感ぜずに居れなかつた。

そんな意苦地のない奴でも、仔だけは孕む。本能といふか、慾望だけは失つてゐないのだ。追はれば身をかくすところを見ても、自分の身だけを守らうとする保身の心だけは持つてゐるのだ。

戦争は日いちちと苛烈の度を加へ、南平も新聞の記事やラヂオの報道に懸命であつたが、そんなとき、ふとその野良犬のことを思ひ返ると、哀れと思ふよりも、何か憎しみの情が起るやうになり、もはや前のやうな負目は感じなくなつた。

「犬も食はない何んとやらか……。」

南平はやつと妻にさつきの歌じやれの借りを返してシャツ一枚になつた。

籠と棒をもつて床下にもぐつた。床下は低いので、這ひながら穴に近づいた。

親犬は居ず、藁屑や枯葉を集めた巢のやうな穴のなかで、五匹か六匹かがひとかたまりにをりクウ／＼言つてゐる。南平は手をのぼした。生温い感觸がしていゝ氣持でない。手に觸れるや否や、それこそ電光石火の如く擱んで籠に放り込むのだが、そういふつもりでも、頭のつかえてゐる低い床下で、腹這へになつての仕事なので仲々はかどらない。

さうやつてゐながら、ふと親犬が來るかも知れんぞと思つた。捜せかけた體や目ヤニの溜つた目や、いつも垂れ下つてゐる尻尾などを思ひ泛べた。しかしそんな犬でも、仔犬をとられるとなると、必死になつて噛みついて來るに違ひない。

野良犬は氣が荒くなつてゐるなどといふ新聞記事を読んだのを思ひ出したりして、いゝ氣持がしなかつた。

心せくがはかどらず、やつとあと一匹だと思つたとき、庭先で親犬の入つてくるのを防ぐために警戒してゐる筈の妻の叫ぶ聲がした。

「あらア大變よ、親犬が居たわよ！」

いま、親犬が來るかも知れないと、思つたばかりなので、南平ははつとしながら、夢中で最後の二匹を籠に放りこみ、その籠を抱える餘裕もなく、棒を握つて體をよぢつてから、うわあと云つた。

例の親犬が異様に目を光らして自分を見つめてゐるのだ。しつ！と南平は乾からびた聲をあげながら野良犬に棒を投げ付けた。

すると親犬はさつと一躍した。やられる。さう感じて南平は頭を抱えて目をつむつたが、實はその反對であつた。

野良犬は威嚇されると、びつくりしたやうに後ずさりし、首をちぢめて尻尾を垂れた。そしてそのまま、反抗する氣配もなく、よろめくやうにして縁光の方に

伊太利の裏切りが新聞に大きく報じられたとき、南平は隅々まで熱心に讀んでゐたが、ふと顔をあげて、

「そうだ、あいつもバドリオだ！」と言つた。

妻は何んのことかと、不審の目をあげたが、南平はカラ／＼と笑つた。そして始めて晴々とした顔になつた。

不憫なものは憫み慈しまなければならぬ。飢ゑたる野良犬を追ひ、罪のない仔犬を野原に捨てたのは、人間の勝手な利己心からかも知れないとそんな反省もチラと起つた。

しかしいまは戦争のときである。仔犬を護れなかつた野良犬の意苦地なさだけは責められてよい。そんな意苦地なしであるから、常に餓え、醜く瘦せ細つてゐたのだ。哀れみとはそんなものに注ぐ愛情ではないと思ふのだ。そう考へることによつて、南平はどこかで割り切れないでゐた心が、やつとふつ切れたやうに思つたのである。

晴れた日、野原で、二匹の犬が睨み合つてゐた。どちらも艶々した毛なみをしびんと耳をたてて、唸りながら、らん／＼たる目を光らしてゐる。駄犬のやうに吠えたり、飛び廻つたり、齒を向いたりしないで、殺氣を孕ましながら、ただの一撃で相手を斃さうと目を光らしてゐるのだ。

散歩をしてゐて、通りがかつた南平は、思はず立ち止つて成り行きを見守つた。

うう……といふ唸りは昂つて、二匹の息使ひは次第に荒くなつて行く。隙があつたら、大地を蹴たてて猛然と噛みつくのであらうが、隙がないのか、二匹は睨み合つたままだ。と、一方が少し歩いた。すると他の方も一寸歩いた。そうして

二匹は睨み合ひながら、一歩々々松原の方に動いて行つた。

逆光線で、その二匹の美事な鬨ひの姿はチカ／＼し、やがて見えなくなつたが、南平はいつまでも茫然と見送つてゐた。

— 11 — 月刊刑政



出席者

東 京 造 船 隊 視 察 會

日 時 九 月 十 三 日 午 後 六 時
 場 所 刑 務 協 會 議 室
 編 輯 局 長 朝 日 新 報 木 川 英 治 氏
 協 理 長 官 正 木 勝 清 氏
 記 書 官 小 川 太 郎 氏
 掛 樋 部 長 川 太 郎 氏



吉川 懲罰と云ふものは、自分の悪に對して死ぬ程の懲罰を加へても、自分の善の見付からない中は、効果はないのです。今一應懲罰の形式の下に、一旦人間が自分の善を見出した姿が、あすこに働いて居る姿です。だから此の話は、僕はどうか國民中に知らしたいと思ふが宮城の管下で多賀城部隊と云ふのがある、多賀は、城址のあるあの附近です。あすこに或る大きな軍事的の建設の作業場がある。ああ云ふ風な同じ姿で出て居る。条件もあれも同じですけれども、その地方はガダルカナルの戦死者が最も多く出た郷土です。さうするとそこに働いて居る受刑者がそれを知つて、一時十一時半の作業時間の外に、夜とか朝とか、農繁期にさう云ふ家の田に行つて、田の草を取つたりして農業を手傳つて居る。その爲にあの附近では一時自分の近村にさう云ふ部隊が来て立交つて働くことは、事前に於ては餘り喜ばなかつたらしいが、さう云ふ姿を見てから村の者がすつかり感心してしまつて、誰も

あれは受刑者だとか前科者だとか言はれて、どうか造船奉公隊のやうな中に、成績が良いからと言つて、出て今日の戦の中に働くやうになれて、さうしてそれが遂げられて、日本が戦に勝つた時には、提灯でも持つて、もう一度、二重橋の前や靖國神社の前に行つて、萬歳を叫びたくないかと云ふと、それが應えたと思つて、「やります。」「やります」と言つて手をあげた瞬間は僕もギョツとしたです。その中にはあの説教強盗の妻木と云ふものも居つたのです。所長が外に出てから、妻木が泣いてみましたよと言つて居りました。が……

なくなつて、さうして赤兵さんと加つて、村人と實に親しくなつて居る。殊に村の青年が實によくなくて、夜になつて話に來たがつたり、それから又作業場に行く時、田圃や畑で村の子供と赤兵さんが戯れ合つたりと云ふ姿が見られると云ふのが、僕は斯う云ふ所にこそ、全くの日本の司法、日本の行刑はあると思ふのです。

鈴木 外國では絶対出來ないことですね。
 正木 今の吉川さんの美談ですが、あの造船部隊長の美談をお傳へしませう。それは大森次官も書かれましたが、二つ氣がついたのですが、一つは、最初造船隊に乗込んで行きます時に、部隊長と宿舎で一緒に寝たわけです。十二月の初め頃ですが、そこで受刑者の布団に寝るわけですから、部隊長は寒いだらうと云ふので、受刑者が自分の布団を部隊長に掛けて、代りばんに起きて居つたと云ふことが一つ。
 それと、これが非常に面白いと思ふのですが、受刑者と云ふものも、非常

に純真な人情に厚いものだと思ふのは、あすこでは釋放者を在郷軍人とやつて居りますが、部隊長はなか／＼親切者ですから、在郷軍人が遊びに來るのです。さうすると、トマトをやつたり梨をやつたりするので、すると部隊長肩を揉ませうと言つて、肩揉みにやつて來るのです。それは皆造船所に勤めて居るのです。その人情は自ら方々に出ると思ふのです。部隊長の肩を揉んだり、御馳走になつたりして居る。その美しい人情が前科六犯、七犯の者にある。大抵一箇月か二箇月で元に戻るのですが、それが、六箇月もあの造船所に勤めて、再犯の氣配がなさうなのは、人情の鑿りが然らしめて居るのではないと思ひます。

吉川 此の間、宮城から一巡して方々に行つたのですが、秋田に行つた時に、これは旅行日程にないので秋田に行つたのです。秋田には無期徒刑、十八年、十五年、十三年と言つた長期受刑者ばかりですから、此處へは訪問の日程がなかつたのです。前の晩にその所長に會つた所が、所長居る姿が見えるのですが、あれと同じで、やはり一つの時が人間を淨化し、人間を生れ變らせ、人間を鍛えると云ふ力は大きなものと思ふ。
 正木 これも私は日本の國民性だと思ふが、十年、二十年前と比べると、今戦争中だから、入る途端に彼等はいまかつたと云ふ感じが以て入るのではないかと云ふ氣がするのです。これは恐らく感想文にもあつて、ちよつと聞いても、自分が戦争する現在に取残されたと思ふことを、今感じ居ることはなと思ひますね。それだから今度の造船部隊でも、多賀城の例でも、行刑の決断とか技術とか云ふものが然らしめたと思ふよりも、要するに彼等の氣持が、しまつた、俺達だけ斯う云ふやうな戦争から取残されて居る。總力戦から取残されて居ると云ふ所に持つて來て、思ひもめぬあすこでやらせて居るのですから、非常に感銘して能率を上げて來て居るのが、一番大きな原因だと思ひますね。
 鈴木 外國ではとても考へられな

と云ふものは、實に我が子のやうに可愛がるのですね。さう云ふものを預かつて居つても、僕には言はないが、周囲の者に言つて居る所を小耳に挟んだのに、うちのあれにも一度でも話して呉れと言つて居る。そこで、あなたの所にも行きませうと云ふので、五時に起きて、六時に向ふに行きまして、起抜けに話したのですが、これは本當に我々から見ても、恐らく絶望的でないかと思ふ人ばかりですが、此處で今日の戦争の状況、それから君達の仲間でも刑の軽い者は、戦争の中で働いてゐると云ふことを續々話しますと、本當にボタボタと泣くのですね。さうして僕が話を終つて室外に出やうと、皆が腰掛けて居る間を通つてドアの所へ行くと、サツと西側から手を出しましたよ。僕は驚いてびつくりした。さうすると兩側からこちらを向いて顔が並んで居るのですが、「やります」「やります」と云ふ聲を僕の背中に浴せかけたのですが、僕はつまり君達でも、もう一度オギャーと生れ直すやうな氣持になつ

て、どうか造船奉公隊のやうな中に、成績が良いからと言つて、出て今日の戦の中に働くやうになれて、さうしてそれが遂げられて、日本が戦に勝つた時には、提灯でも持つて、もう一度、二重橋の前や靖國神社の前に行つて、萬歳を叫びたくないかと云ふと、それが應えたと思つて、「やります。」「やります」と言つて手をあげた瞬間は僕もギョツとしたです。その中にはあの説教強盗の妻木と云ふものも居つたのです。所長が外に出てから、妻木が泣いてみましたよと言つて居りました。が……

鈴木 歌舞伎役者に、尾上多賀之丞と云ふのがありますが、三崎座あたりで女形をやつて居る時は實に綺麗であつたが、その當時、彼が、淺草の宮戸座あたりに出て居る時には、花道を出て來ると、見物の若い女が、手を出して裾を掴んだと言つてみました。藝や話に感激すると、思はず手が出るのだと云ふことです。尤も多賀之丞に出した女の子はちよつと違ひますが、

吉川 此の間廻つて來た受刑者の感想文の中に歌があつたが、あれは良

吉川 丁度此の前、僕が鈴木さんのおいでになつた東京造船部隊に朝出掛けに、新聞を見たら、ヴェノスアイレスの、此の頃新聞にまだ出て居りますが、アメリカの子供のある父を出征させるなど云ふ反対が、まだ問題になつて居りますが、あの初めの記事が出て、あれに反対論を唱へた。天國を書いたルイス・ローレスが、アメリカは、子供のあるババを戦場に送るよりも、それよりもアメリカの受刑者を前線へ送るべしと云ふ反対論をして居ると云ふ話を、あなたの方に行つて居る時にしたのです。此の話は、日本のそれとは、全然精神の違ふもので、日本の司法の仁愛と申しますか、さう云ふものと比べ合せて話しますと、實際よく分るらしいのです。

正木 感想文にも出て居りますね。

吉川 あの話はよく分るらしいですが。

鈴木 東京の造船部隊のことに付て伺ひたいのですが、あの部隊は朝五時に起きて仕事に掛るのは七時です

正木 参加して出ると百五十個位からやるのですが、良いのは三百八十個。今日の函館の報告に依ると、四百個貫つて居るのが居る。職員は是は幹部は別として、一般の看守諸君はこれが半分ですよ。いや半分もいかにねですよ。それで、他の職工ならバランスの問題を言つたりするでせうが、一つも文句を言はず、妻子の所を離れてやつて居る所を見ますと、やはり日本の下級官吏の吏道もすたれて居ないと云ふ心強さを感じますよ。

鈴木 それは司法省だけではないですか。私はお世辭なく言ふのですが、日本の刑務所と云ふものは、一番思想的に進んで居ると思ふ。岡部さんも言はれたのですが、行刑課に入られた緒れも簡単に聞いたのですが、私は元、社會部長なんかして、私は随分警察と關係が深かつたのですが「豚箱に入れられたり、監視廳に呼出されたり、私の友人なんかで、一月も二月も打込まれたのがあるが、その話を聞いて見ると、實に酷い。だから刑務所はどんなに酷いかと云ふ感じを持つた

正木 さうです。正味十時間で、三十分だけ休むのです。

鈴木 見て居ると、相當きついや言へばきついでせうか。他の大きな工場で機械的の仕事をするのと違つて思切りハンマーを揮ひ、鍛冶屋のやうなこともやるので、本當の大きな工場に行つて、色々仕事をやつて居るより、むしろ私は、彼等に取つては非常に伸とした氣持で、仕事が出来たらうと云ふ風な、直感を得たのです。事實さうでないでせうか。

正木 事實さうですね。

吉川 刑餘の身が、青空の下に置かれると云ふことは、第一に感激して居るのではないでせうか。

鈴木 我々が見て居つても氣持がいゝですね。青空の下で。

吉川 手錠とか、繩とか、一人一人がついて居ると云ふことがなく、殆ど野放しにしてあつて、彼等の意思を

以て自由に居る所は、實際何と云ふか、それを受ける方に素質がなくては出来ないですね。唯制度だけ權力だけでは出来ない。

鈴木 それから紙芝居をやるのに、同じ仲間が入つて紙芝居をやることは、勿論思切つてやつたのだと思ふが、あれは造船部隊が出来てからやつたのですか。

正木 さうです。

鈴木 あれは恐らく、一番突進んだやり方と思ふ。あれは何處も非難出来ないもので、ああ云ふ風な責任を持たされては、普通の看守以上にやらうと云ふ氣になると思ふ。それから自分等の仲間がやると云ふことも氣持がよいのではないかと思ふ。これは實に上手だね。つくづく僕はあれを見て感心した。

正木 これは戦争が始つてゐない時の前時代に、こんなことをやつて野放しにしてやつたら、實に刑罰と云ふものをあんなことをしてと、外から非難轟々だらうと思ふのです。今度始めた時も非常に心配したのは、ああ云ふ

吉川 あすこだけで歸つたものが、まるで逆なんだ。岡部さんなども一つの良い仕事と云ふか、理想的な考を以て刑務所に來ると、刑務所に於ては、既にそのことけなく、改善すべきことはむしろ、警察の豚箱で、これが何の人情もなく、道義もなく一番酷いのです。

吉川 あすこだけで歸つたものは、反抗だけしか持つて來ない。

鈴木 これが僕は内務行政として安閑として居るべき時でないと思ふ。

吉川 數にすると随分多いでせう。

正木 今の拘留刑の數は、一年實人員七萬五千人位です。無理もないのは拘留刑にやられるのは、警察の留置場で實行するのです。警察と云ふものが、入れる本體でないから、留置場の室が、少い所は三つ位しかない。一齊檢舉でもやつた時には、何十人とあげると云ふことになる、勢ひ一つの室に何十人と入れなければならぬと云ふことになるのですから……

吉川 拘留刑に處されたものでせう。

野放しにして、職員が國民服を着て、劍を持たずに規則違反をやつて居るのですが、あれを見においでになる方が、非難せず、よいことだと言つて居られる。これは日本の戦時刑罰と云ふものゝ一つの概念を、すつかり今までと違つた形で、國民が承認して呉れたものと思つて、これ位なら、やつても非難は受けないだらうと思つて、安心して居るのですが、之を見ずに居ると、實に大變な刑罰と云ふものを弄ぶやうに感ずる場合もあるだらうと思ひますが、御覽になつた方には皆共鳴して戴いて居るのです。

鈴木 仕事には、むづかしい仕事と、易しい仕事があるでせうが、これは最初造船會社から指導者が來て教へ込むのですか。

正木 さうです。

鈴木 すると覚え方の早い者と晚いものがあるでせうが、その差はどんなものですか。

鈴木 大體工場は、テストと云ふものをやつて見て居りますが、大差ないですね。しかし、早く覚えると云ふ

正木 あすこは一晚入つて居れとか言つて出入をさせるのですからね。あすこに入つて訓戒を受けて慙愧して出て來るのは、恐ろくないね。皆こぢりが出て來ます。

鈴木 私は刑務所を學校と云ふ感じがしますね。これは最も進んだ正當なやり方と思ふ。恐らく今日我々が見た感じから言つても、規則正しく集つて、さうしてああ云ふ立派な歌を必ず歌つてやると云ふことは、ああ云ふ連中は若し刑務所に來なかつたならば、さう云ふことに絶対に教養のチャンスのない人間ばかりと思ふ。或る意味では彼等は來たことに依つて、確かに得して居る點があると思ふ。

吉川 だから僕は子供の足並見たやうなことが自ら出て來るのではないかと思ふ。

正木 參加して出ると百五十個位からやるのですが、良いのは三百八十個。今日の函館の報告に依ると、四百個貫つて居るのが居る。職員は是は幹部は別として、一般の看守諸君はこれが半分ですよ。いや半分もいかにねですよ。それで、他の職工ならバランスの問題を言つたりするでせうが、一つも文句を言はず、妻子の所を離れてやつて居る所を見ますと、やはり日本の下級官吏の吏道もすたれて居ないと云ふ心強さを感じますよ。

鈴木 それは司法省だけではないですか。私はお世辭なく言ふのですが、日本の刑務所と云ふものは、一番思想的に進んで居ると思ふ。岡部さんも言はれたのですが、行刑課に入られた緒れも簡単に聞いたのですが、私は元、社會部長なんかして、私は随分警察と關係が深かつたのですが「豚箱に入れられたり、監視廳に呼出されたり、私の友人なんかで、一月も二月も打込まれたのがあるが、その話を聞いて見ると、實に酷い。だから刑務所はどんなに酷いかと云ふ感じを持つた

正木 さうです。正味十時間で、三十分だけ休むのです。

鈴木 見て居ると、相當きついや言へばきついでせうか。他の大きな工場で機械的の仕事をするのと違つて思切りハンマーを揮ひ、鍛冶屋のやうなこともやるので、本當の大きな工場に行つて、色々仕事をやつて居るより、むしろ私は、彼等に取つては非常に伸とした氣持で、仕事が出来たらうと云ふ風な、直感を得たのです。事實さうでないでせうか。

正木 事實さうですね。

吉川 刑餘の身が、青空の下に置かれると云ふことは、第一に感激して居るのではないでせうか。

鈴木 我々が見て居つても氣持がいゝですね。青空の下で。

吉川 手錠とか、繩とか、一人一人がついて居ると云ふことがなく、殆ど野放しにしてあつて、彼等の意思を

鈴木 二月十九日からで、そんなにあるのですか。

掛橋 さうです。正味十時間で、三十分だけ休むのです。

鈴木 見て居ると、相當きついや言へばきついでせうか。他の大きな工場で機械的の仕事をするのと違つて思切りハンマーを揮ひ、鍛冶屋のやうなこともやるので、本當の大きな工場に行つて、色々仕事をやつて居るより、むしろ私は、彼等に取つては非常に伸とした氣持で、仕事が出来たらうと云ふ風な、直感を得たのです。事實さうでないでせうか。

正木 参加して出ると百五十個位からやるのですが、良いのは三百八十個。今日の函館の報告に依ると、四百個貫つて居るのが居る。職員は是は幹部は別として、一般の看守諸君はこれが半分ですよ。いや半分もいかにねですよ。それで、他の職工ならバランスの問題を言つたりするでせうが、一つも文句を言はず、妻子の所を離れてやつて居る所を見ますと、やはり日本の下級官吏の吏道もすたれて居ないと云ふ心強さを感じますよ。



死の覺悟

伊集院 哲

山本神右衛門常朝の『葉隠』の開巻劈頭に、「武士

道といふは、死ぬ事と見付けたり。二つ／＼の場にて、早く死ぬ方に片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわつて進むなり 圖に當らぬは大死などといふ事は、上方風の打ち上りたる武道なるべし 二つ／＼の場にて、圖に當るやうにわかることは、及ばざることなり。我人、生きる方がすきなり。多分すきの方に理が付くべし。若し圖にはづれて生きたならば、腰抜けなり。この境危ふきなり。圖にはづれて死にたらば、大死氣違なり。恥にはならず。これが武道に丈夫なり。毎朝毎夕、改めては死に／＼、常住死身になりて居る時は、武道に自由を得、一生越度なく、家職を仕果すべきなり」といふ、おそろしく矯激な一節がある。また、これにすぐ接して、「奉公人は一向に主人を大切に歎くまでなり。これ最上の被官なり」とある。『葉隠』全十一巻の究極するところ、結局、ここ

のところに凝ると言ふも過言ではない。生きるか死ぬかの、二つに一つの場合には、別に仔細はない、ただ死ぬまでだ、効果や結果のいかんはまつたく問ふところではない、臣たるものは主君のため恥も外聞もすてて、ただ無二無三死狂ひすればよろしい、これで武士道は立つ、と言ふのである。これは、まさに、戦りこみの極致である。一切の私への念慮をすてて、主君への献身に徹的に生きぬくところの、わが國傳統の武士道精神の典型的表現である。

これを、たとへば「武士ならんものは、正月元旦の朝、雑煮を祝ひ、箸をとり初むるより、其年の大晦日に至るまで、日々夜々、死をつねに心に宛つるを以て本意の第一と仕り候。死をさへ常に心にあて候へば、忠孝の二つの道にも相叶ひ、萬の悪事災難をも遁れ、其身無病息災にして、壽命長久に、剩へ其人柄までもよろしく罷成、其徳おほき事に候」(大道寺友山『武

○

さきごろの新聞は、「生産に烈々の責任感、若き技

術士官の自決」なる見出のもとに、吳海軍工廠にぞくする若き一技術士官が、自己の擔當する工事がおもふやうに進捗しないといふ責任感から、見事な割腹自決をとげたといふことを報じて、肅然、われわれの襟をたださしめるものがあつたが、その上官へ残された遺書のなかに次のやうな文字があつたのを、注意ぶかい讀者はなほよく記憶してをられるであらう。すなはち、「……小官の失態亦軍の行動に影響を及ぼし、畏れ多くも宸襟を惱まし奉る、その罪萬死に値せん、徒らに死を急ぐは卑怯未練に似たれども、荏苒日を過ぎんも恥を重ねるのみにて、果ては海軍軍人の面目を失墜せしめんことを懼れ、本日茲に自決を決意せり、云々の箇所である。「畏れ多くも宸襟を惱まし奉る」と言ひ、「海軍軍人の面目を失墜せしめんことを懼れ」と言ふ、よく「全體」の尊嚴性を體認せるもの言である。

溘然として自らのちを絶つ、その死まことに悲しむべきかぎりであるとはいへ、その行爲はよく恥をしる武人として、一世を鞭うち、時人をいましむるに足るものと言ふべきである。

道初心集」や、「武士はたゞ死ぬるといふ、道を嗜む事と覺ゆる程の儀也」(宮本武蔵『五輪書』)などの合理、穩當、洗練であるのに比すれば、言葉はいかにも矯激、一徹、粗野の觀があるけれども、これをよくよく玩味してみるときは、われわれはそこに實にふかい日本の教智のひらめきを見出しておどろくのである。

すなはち、ここには死に徹することにおいて、生への執着・死への恐怖を破砕して、生死の相對をたかく超越した絕對自由の境にいたる、言はば自由満達の人間道が含蓄ある言葉で語りあかされてあるのでなければならぬ。生死を超えて、歴史的全體と一つになつて行爲する歸一と無我の日本精神、歴史を創造する行爲的創造的精神かもつとも端的な言葉をもつて説かれてあるのである。

大東亞戰緒戦以來のわがめざましい戦果の根基は、物に重きをおき、數をもつばらかぞへる彼等米英人の唯物的個人主義觀念をもつてしては、つひに理解しがたいものがあらう。彼我の據つてもつて立つ基礎原理は、まつたく異なるのである。かうした日本武士道精神の絕對境を理解しなかり、それは彼らにとつて永遠の謎である。

ひに一兵の増援もとめず、一言の私情をも訴へることなく、皇軍の本領を敵前に發揮すべく全員見事に玉碎しはてた。また特殊潜航艇の若い軍神たちは、「君のため何か惜しまん若櫻散つて甲斐ある命なりせば」の淡々たる心境で、生きてふたび還へれぬ眞珠灣口奥ふかく突入していつた。その他、いたるところの戦場において、無數の將兵が「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君の邊にこそ死なめ顧みはせじ」の境を、次から次へと實現していつた。

このやうに、むしろ死を選ぶといふやうな絕對自由の境は、いかなる根據にもとづいて可能なのであらうか。すでにみたごとく、個の一切を喪失しても、なほそこには、個をつつみ、それを超える全體が嚴然と在するといふ不動の信があるからである。この第一義のまへには、死の恐怖のごとき、まつたく謂はれなきものである。しかも、わが國においては、この全體は單なる觀念としてのそれではなく、上御一人を中心とする家的共同體としての、まつたき實在なのである。したがつて、死に徹するといふことは、このやうな共同體における個的存在としての人間が、その本来の生き方を身につけるための掟であると言はなくてはならぬ。本来の日本人となるためのきびしい作法なので

ある。
さうだとすれば、「毎朝毎夕、改めては死に／＼、常住死身に」なつて、言はば死の習練を日常つむといふことは、なにもひとり武人にかぎつたことではなく、むしろひろく一般に、われわれ國民たるものの作法そのものでなくてはならぬはずである。

○
「常在戰場」といふことが、ちかごろよく言はれる。いつなごき御召をうけて第一線に立たぬともかぎらぬばかりか、敵機空襲もいつあるか、まつたく油断ならぬ今日の戦局であつてみれば、われわれ銃後國民といへども、文字どほり、常に戰場に在るのでなければならぬ。現代の戦争性格は、銃後をもまた戰場の一部としてゐるのである。死は銃後國民にとつても間近いのである。かくて、死の覺悟なくしては、もはや一日といへども叶はぬものと、われわれは悟らなければならぬ。「常在戰場」の標語は、このやうに考へるならば、われわれに「死の覺悟」を嚴肅にもとめてゐることが明らかになるであらう。

白は黒につき合されて、はじめて白の本性をもつとも鮮明に發揮する。われわれの生も死の否定とつき合する。そして、この武士道精神の精髓はなほ今日にも傳統し、支那事變、大東亞戦争において、幾多の若き皇軍勇士の働きに明々と現じてゐるのである。ところ、武士道精神のつとつて、死の習練を日常つまなければならぬのは、なにもひとり武人のみにかぎつたことではなく、むしろ、ひろく一般にわれわれ國民たるものの作法でなければならぬといふことは、すでに述べた。唯物的個人主義的な作法をすてて、われわれは傳統の切腹作法をあらためて、しかと身につけなければならぬ。切腹作法を身につけることなくして、日本の産業戦士はありえぬのである。大學出の若き技術士官が、いのちをかけてその範をわれわれにしめてくれた。技術士官の死に、われわれはふかく／＼恥ぢねばならぬ。

しかし、「葉隠」も言ふごとく、「愚人の習ひ、私なくなること成りがたし」(聞書第一ノ四)である。そして、「皆人、物を深く案すれば、遠き事も案じ出すやうに思へども、私を根にして案じ廻らし、皆邪智の働きて、悪事となる事のみなり」(同上)であり、「我が智慧一分の智慧ばかりにて萬事をなす故、私となり天道に背き、悪事となるなり。脇より見たる所、きたなく、手よわく、せまく、はたらかざるな

はされることによつて、はじめて生本來のあり方をもつとも活潑にせしめす。そして、そのやうな本來の姿をあらはにした生の立場から眺めるときは、これまでの日常的些事も、もはや、かならずしも些事ではなくなる。「葉隠」もこのところの消息を、「五六十年以前迄の士は、毎朝、行水、月代、髪に香をとめ、手足の爪を切て輕石にて摺り、こがね草にて磨き、憚意なく身元を嗜み、尤も武具一通りは錆をつけず、埃を拂ひ、磨き立て召し置き候。身元を別けて嗜み候事、伊達のやうに候へども、風流の儀にてこれなく候。今日討死／＼と必死の覺悟を極め、若し無嗜みにて討死致し候へば、兼ねての不覺悟もあらはれ、敵に見限られ、きたなまれ候故に、老若ともに身元を嗜み申したる事に候」(聞書第一ノ六三)と語つてゐる。生死をはなれて絶對自由の境にいたれば、一事に宇宙を全收する働きが現成し、眼前の一事を絶對事とするにいたるのである。さればこそ、あの技術士官の兩親あての遺書にもあるごとく、「父上と致しましては、生きてその失敗を償ふだけの立派な働きをしたらとも思召すかも知れませんが、技術科士官として、帝國海軍軍人として、これ以上生恥を曝すを潔しと致しません」と

て、自決してはてねばならぬのである。また、「恥知り」(同第一ノ五)である。では、いかにしてこの「私」を排除するかといふと、「葉隠」は「事に臨んで先づその事を差し置き、胸に四誓願を押し立て、私を除きて工夫いたさば、大はづれあるべからず」(同第一ノ四)と訓へる。ここに言ふ四誓願とは同書の序文ともみるべき「夜陰の閑談」中に、「七生迄も鍋島侍に生れ出で、國を治め申すべき覺悟、膽に染み罷り在るまでに候。氣力も器量も入らず候。一口に申さば、御家を一人して荷ひ申す志出來申す迄に候。同じ人間が誰に劣り申すべきや。惣じて修行は、大高慢にてなければ役に立たず候。我一人して御家を動かさぬとかうらねば、修行は物にならざるなり。また華雜道心にて、さめ易き事あり、それは、さめぬ仕様あり。我等が一流の誓願、一、武士道に於ておくれ取り申すまじき事。一、主君の御用に立つべき事。一、親に孝行仕るべき事。一、大慈悲を起し、人の爲になるべき事。この四誓願を、毎朝佛神に念じ候へば、二人力になりて、後へはしざらぬものなり」と説明されてゐることによつておのづから明らかであらう。

この四誓願は、平生から念々思案しておかねばならぬものである。平生はほとんど顧みることもなくて、

りたる兒女などは、屁一つにて命を捨て申し候」(聞書第八ノ四三)といふやうなこともなるのである。ところで、死の覺悟をかため生死の境をはなれるといふことは、他の言葉で言へば、一切の私をすてさるかりて言ふならば、唯物的個人主義の超克といふことである。だから「葉隠」が「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」と言ひ、「奉公人は一向に主人を大切に歎くまでなり」と訓へてゐるのは、君國のために一切の私意を去れ、唯物的個人主義の心情をいさぎよく放棄せよ、といふ意味である。

まことに、私意を排除することができるならば、「葉隠」にも言ふごとく、「武道に自由を得、一生越度なく、家職を仕果すべきなり」である。更にその徳をかぞへるならば、「死をさへ常に心にあて候へば、忠孝の二つの道にも相叶ひ、萬の悪事災難をも遁れ、其身無病息災にして、壽命長久に、剩へ其人柄までもよろしく罷成、其徳おほき事に候」(武道初心集)となる。

以上みてきたごとく、わが武士道の精髓は、自己放棄の絶對無我の神聖きはまりなき境を實現するにあいざといふ場面のぞんでは、見ぐるしい錯誤におちいること必定である。次の一節は、このところを語つてゐる。「直茂公の御壁書に、『大事の思案は軽くすべし』とあり。一鼎の註には『小事の思案は重くすべし』と致され候。大事と云ふは、二三箇條ならはあるまじく候。これは平生に僉議して見れば知れてゐるなり。これを前廉に思案し置きて、大事の時取り出し軽くすることと思はるゝなり。兼ねては不覺悟にして、その場に臨んで軽く分別する事も成り難く、圖に當ること不定なり。然れば兼ねて地盤をすまて置くが、『大事の思案は軽くすべし』と仰せられ候箇條の基と思はるゝなり。」(同第一ノ四六)

かくて、毎朝毎夕、この四誓願を胸に押し立て、常住死身になつてをるときは、さしも頑固な「私」もつひに去るのである。

現代のわれわれの胸に押し立てるべき誓願が、いかやうな箇條と文句でなければならぬかは、もはや私がここで書きあぐるまでもないことである。いまは、ただそれを日常の生活においてひたすら行すべき秋である。



望展内國際國

伊・裏切りの真相と 「無降伏の哲學」

原 祐 三二

わが戦路要線にくさびを打込み、これを寸断に導かんとする敵の反攻企圖は、十二月一日にはブーゲンビル島へ、十二月十九日にはギルバート諸島のマキン、タラワ兩島へ向けられて、これら諸島へとりつき、今やわが皇軍守備部隊と文字通りの死闘中である。此の上陸軍への補給のため、性懲りもなく押出してくる戦艦隊や機動部隊は、次々にわが荒鷲の餌食となつて戦果日に上りつゝある實状である。

彼等は莫大な鐵量を有し、老大な生産力を擁する國であるから、やるべきが大がかりで、従つて戦争も贅澤極まる豪華版である。われらの考へ方では、これら諸島の上陸軍が、僅かばかりの橋頭堡を築くだけに無数の艦隊と飛行機を失ひ、ギルバート方面のみでもその数は航空母艦十一隻を含む艦船廿二隻（十二月一日第四次ギルバート航空戦迄）、飛行機百廿五機は、餘りに高價な犠牲のやうであるが、彼等はこれが資材だけの損害であるならば、手剛い日本軍を攻むる場合の當然の犠牲と考へるかもしれない、結局に於いてこれら諸島に於いて立場を固め、日本の戦路據點と資源基地とをつらねる南方共榮圏の外縁へくさびを打込み、こゝから穴をひろげて、ついには日本の必勝戦路體制を崩壊に導くことができれば、結局に於いて充分償はれると考へて居るのかもしれない。物の損害といふものに對して、わが國より大膽な考へ方をするであらうと思はれる米國に對しては、それだから、充分なる警戒を要し、何としても國內の軍需資材の生産を振興して、寸分の隙も與へず勝つて勝ち抜かねばならない。今迄の如き赫々たる戦果が、いつの場合でも續かねばならない。いくら米國の艦船補充力や飛行機生産力が旺盛だといつても日本の飛行機と彼等の艦船との差し違へが何時迄も行き詰らぬ筈はないし、殊には艦船の沈没は必ず莫大な人的生命の損失を伴ふものであり、かゝる損害が息つくひまもなく續いて居れば、必ず彼等は手をあげざるを得ない。

日本軍には降伏もなければ捕虜もない。これが絶大な強味である。戦争に於ける

人的損害の最大な項目は降伏と捕虜である。獨ソ戦以來のソ聯の絶對損害は、捕虜五百萬、戦死五百萬と云はれる。五百萬の戦死は多いには多いが、もし捕虜がなかつたら、戦死によつて被る損害ぐらひは割合に忍び易いものだ。殊にあらゆる守備隊が、アッツ島と同じく最後の兵まで戦ふとすれば、此の玉碎によつて敵に與へる人的損害は、常に我に數倍するものであり、かゝる作戦を續けて居れば、一億の國民を有する日本が、一億三千五百萬人しか人口のない米國を敗北せしめ得ない筈はない。殊に前線の或る人的損害に對し、銃後の政治的思想的、厭戰氣分の反應は、日本などと到底比較にならぬ程敏感なるべく、銃後の體制は、非常に弱いものと信じられる。即ち物の量を誇り、これを強みとする米國も人の點ではその最弱點をなし、殊に絶對に捕虜を出さぬ皇軍の前には全く勝味がないのである。近頃ブエノスアイレスから來た同盟電報は、十一月三十日のニューヨーク・デリー・ニューズの社説を傳へて居るが、此の社説は誠に右の事情が、われらの獨善論でなく、敵にとつても惱みとなつて居る事實を裏書きせるものだ。即ち次の通り。

『われわれは日本に對してガス戦術を採用しなければならぬ。試みにこれまでわれわれが對日戦で何をなし遂げたかを通観してみよう。米國は人的資源の上で日本の二倍に當らず、更に日本にはアジア人その他太平洋諸島民二億が味方して居る。然も日本人全部に見られる『無降伏の哲學』は日本軍將兵をして死に至るまで戦ひ、多數の敵と刺し違へて死ぬといふ勇戦を行はしめて居るのである。若しわれわれが太平洋珊瑚礁を悉く占領するとせば、タラワに於けるが如き損害を重ねることを覺悟しなければならぬ。更にかゝる方法によつて日本本土に迫ることは不可能である。われわれが採り得る日本打倒のたゞ一つの方法は、毒ガスが致命的損害を與へる武器であるならば、われわれは日本に對して毒ガスを使用すべきである。肺の中に入つたガスと内臓内に喰ひ込んだ彈丸の破片には、何らの差別はないのである』と。

戦ひが苛烈化し然も勝味がなくなると、遂に卑劣な手を考へ始める戦争力の

窮極の源泉が國民であり、人口であつて、然もその點弱點こそあれ、敢へて特別の強味とてない米英が、戦争終結を焦りだすとき當然打つて來る手は銃後國民の大量殺戮といふ方法だ、そしてかゝる戦争の方法は、そろ／＼敵の戦力増強が行詰り傾向に達した指標であり、輿論的な戦争意識が、末期的焦燥を呈し始めた證據である。最近のベルリンやハンブルグに對する英米の空襲は、早くもかゝる性格を呈し始めて居るが、われらも戦力増強と共に、彼等がこれからやつて來るであらう鬼畜の姿を洞察して、萬全の防空體制を整へねばならない。

此の頃ドイツ軍最高司令部から、バドリオ裏切の全貌がその詳報として公表せられた。それによつてわれわれは、バドリオの裏切が決して一朝になされたものでなく、極めて早くから計畫され、またやせても枯れても、一國の信義として、世にも卑劣な乞食根性によつて遂行されんとし、然もまんまと裏を掻かれて徒らに物嗤ひの史實となれる世界史的な道化芝居なりしを知るべきであった。

陰謀は開戦當初から存在し、王黨の反動派の一派は、ムツソリーニ首相が必ずや獨逸との盟約を尊重してその履行に忠實なるべきを推察し、デイー・グランデを後繼者としてムツソリーニとその政策を、一擧に顛覆せしめんとしてきたのである。一九四一年の四月四日にある注目すべき事件をきっかけとしてバドリオが反對者の首位に置かれるやうになつた、本年一九四三年二月上旬伊太利軍參謀長カヴァレロの失脚によつて王黨派がいよ／＼露骨に表面へ現れ、カヴァレロの後任たるアムプロジョ將軍は、王黨派の傀儡にすぎなかつたのである。

これより先、バルカンに於いては、ユーゴスラビアの後ヘクロアチアを立て、此の國家の育成強化を獨逸の國策とせるに對し、同方面の伊軍團長ロアツタは王黨派であつたから、サヴォイ王家から同國の王の、候補者を出し、ブルガリア、ギリシャをも王黨派の勢力下に置かんとし、獨逸の國策を妨害した。殊にセルビア人の匪賊軍ともいふべき『ツエトニツク部隊』に武器彈藥食糧を給し、公然これを保護して獨逸の占領地治安工作を妨害し、アムプロジョもロアツタも獨逸の再々の抗議にサボ的態度をとつて居た。ロアツタがバルカンからシチリアへ移つた後もロポツチなる手下を後任に残し、相變らず反盟的な態度を行はせた。遂に獨軍がツエトニツク部隊の討伐をなすやロポツチ大將は『ツエトニツク民軍は、イタリヤ軍部隊と同等の權利を有するものである』と公言し、獨逸軍の撤退及び獨軍の俘虜となれる暴動首魁者の引渡しをすら要求するに到つた。

伊軍の中樞が、アムプロジョに占められて後は、伊軍は日に日に戰意を失ひ、北阿の伊軍は積極的作戰を怠り、獨軍との協力をなさず、地中海のパンテラリア及びランペドゥサの二要島は、何ら戦はず、敵の發砲一發を以つて白旗を掲げ、シチリア島の防備は申譯のものにすぎず、此の間に於いてロアツタが參謀總長となつてローマへ歸任した。愈々裏切りの筋書は整つてきた。

英紙タイムスが『シチリア沿岸の防衛に當つて居たイタリヤ軍は全然發砲しな

かつた』といひ英軍事評論家が『伊軍士官たちは海水浴をするのに邪魔になるといふので折角の敷設水雷も全然發火裝置を開放してなかつた』と報告して居るのも明白な通り、シ島の伊軍は全く戰意がない、米英軍の上陸に戦はずして降つて了つたのである。

ムツソリーニ襲撃政變後のバドリオ政權は、上へは獨逸との盟約を尊重すると稱し乍ら、しきりに裏切りの準備を進めた。その方法は、或は在伊獨軍の指揮權を要求して獨軍の配置を彼等の安全と降伏の場合、米英に獻じ得るやう變更せんとしたり、殊更に海軍次官を親獨的として定評のあつたドクトルトンに代つて獨逸に油を要求し、全艦出動脱走の準備をしたりした。

然し乍ら此の八月中に再々起きたバドリオの下に於ける不可解なる政治の動きや軍の動きを何條獨逸が看過すべき、獨軍は欺瞞されたる風を裝ひ乍ら、満を持して警戒を怠らなかつた。バドリオの使者カテラノ大將が、シラクサのアイゼンハウアー本營で降伏狀に調印した同日同時に於いてすらバドリオは獨軍に向つて『我々は固ひ決して降伏しない』といふ確言をその外相をして獨逸代理大使に繰返へさせた。然も伊軍を獨軍の背後へ配置し、伊艦隊の在泊せるスペチア軍港へ對して通行禁止區域を設け獨軍を近付かしめず、着々裏切りの仕上をした。殊に呆れ果てたのは、サボイア王家よりヒットラー總統に對し、急遽イタリヤを訪問し、國王及びバドリオ政府と共同の敵に對する防戰強化措置を協議されべき旨を懇請し、あわよくば、ヒットラー總統とその幕僚をもムツソリーニと共に米英に獻じて降伏條件の土産にしやうとしたのである。

九月六日十八時四十五分獨大本營は、アメリカシンシナ放送局からの伊國降伏の放送を聴取した。獨軍はこれによつて緊急の準備を命じ得た。此の瞬間に於いてすら、國王及びバドリオ、ロアツタは頑強に裏切りを否定し二枚舌を續けて居たが、十九時四十五分ドイツ代理大使が確證を握つたので、在伊獨軍は非常な困難な地位にあつたが、電閃一下、到る處ろの獨軍は連絡を確保し、要地を占領し、伊軍を武装解除し、ムツソリーニ首相を奪還して、伊太利の反逆を粉砕して了ひ國王ヴィクトル・エンマヌエルとその子ウムベルト・ド・リオらの一味は命からがらシチリアへ逃げて米英に投じた。

かくしてムツソリーニ政權下に非る伊太利國民は焦土から救はれたのではなくて希望なき焦土へ投げ込まれ、世界一の卑劣國の不名譽を與へられ、もはやどちらの陣營が勝つても、何の發言權もなく、永久の敗戦國と決したのである。此の裏切劇に踊れる前國王、皇太子、バドリオ、ロアツタ、アムプロジョらは道化者といへばあまりにも亡國的な道化である。我らは、此の經緯を知るとき、伊太利の没落が、南歐作戦の痛を外科手術にかけ、健康と純一を取戻したとの屢次に亘る全くの聲であることが理解できるのである。戰意なき戦友！これほど頼もしくなく、また荷厄介なものはあるまい。

交友記

石塚友二
長七郎
第二回



折居新吉の出征したあと、間もなく折居の細君は、戸澤正作の畫力で機械製作所の事務員に勤めの口を見出した。この経緯が聊か風變りで、いかにも戸澤の面目を躍如たらしめるものがあるので雑と挿話風に述べて置く。

戸澤の生活は、紙芝居の繪を畫くことで支へられて來てゐる、それはたしかであるが、しかし彼はそこに自分の本來の天職を見出し従つてゐるわけではなかつた。紙芝居そのもの持つ重要性若しくは紙芝居の繪の受持つ特別な効用性といふやうな問題については、近來ますます關心と興味を深めこそすれ、その仕事に對する畫家としての自嘲等全く感じられず、寧ろ偶然の機會からさういふ仕事に従ふことになつた天の計らひともいふべきものに對して感謝したいくらいだつた。實際、このことに關係する前には紙芝居などといふものは、大人が子供をだしに使つてしがない生計を營む道具としか考へられず、また事實それに近く、荒唐無稽な物語と、極めて野卑な繪を以て、つまり安易な頭で編まれた一夜漬の種本、間に合せのポンチ繪の組合せが紙芝居といふ一文菓子を商ふ客寄せ道具に過ぎなかつたので、多くの人たちと同様に戸澤も亦無關心で過して來たわけだつたが、計らずもその繪の方を受け持つこととなり、親しく筆を執り、且つだんだん仕事に馴染んで來るに従ひ、いままでのこの種の繪が如何に出鱈目千萬な、非繪畫的なものであつたかがかへり見られると共に、童心に正しい美しい繪を與へることの必要さが痛感された。そして彼はそれを實踐することに覺えざる喜びを感じ、そこから無垢の心に結びつくことの透明な樂しさを味はつた。暮しのために執つた手段が生甲斐を伴つて來た意外さは、考へれば揆つたい結果に違ひなかつたが、戸澤はこれがありがたい辯理と素直に受け取つて來た。そして彼は紙芝居の畫を描く仕事に充分の意義を覺え、ここに終始し兼ねない風に見えた。

それほど仕事に熱心だつたし、熱中よりも窺はれるのだつた。折居新吉を初め戸澤を繞る友達達は、元來紙芝居などといふものに對しそれほどの關心を持ち合せでもゐず、従つてその繪を描く役割の本當の重さについて考へる暇を有たないために、戸澤のこれに拂つてゐるのは要するに暮しの便宜からとしか解釋出來なかつた。そして友達達のいひ合したやうな意見といへば、戸澤がさういふ職人染た仕事からはなるべく早く足を洗つて、ぜひ其本來の畫家としての仕事に取かかつて欲しいといふ注文だつた。彼等には何となく戸澤が道草をして遊んでゐるやうに思はれ、それも生活の止むを得ない方便とあればまづ暫らく我慢して許して置いてよいが、どうやらその道草の面白さ安易さに捉へられて肝腎の本分を忘れさうな面持が見える、戸澤の仕事に對する熱の入れ方はさういふ風に友達連中の眼に映つた。そして今のうちに注射して置かないと助からない結果を招く、さういふ診斷が誰からとなく下されると、それから戸澤は會ふ友達ごとに現在の仕事を攻撃され出した。藝術家の面目に立ち返らない限り附合はないゾ、と眞向から威してかかる友達もゐた。しかし、友達達が眞面目に忠告すればするほど戸澤の仕事に對する態度は熱を帯びたものとなり、ますます熱する感じでの應酬ぶりが見られるのだつた。困つた奴だといふことになつた。

ところで、戸澤正作の心中には、友達達の騒ぎ出すもつと前から、絶えず醒め續けてゐる一つの眼があり、彼が紙芝居の繪の仕事に深い意味を感じて熱心になつて行くのとは關りなしに、否、熱中すればするほど澄んだ光を投げて來て止まぬものがあつた。その醒めた眼は戸澤と人に知られざる畫家、深夜の畫家とも呼ぶやうなものに仕立て來てゐるのだつた。友達連中の誰一人として知るものはないが、戸澤の、友達一人が感しの言葉として放つたいはゆる藝術家の面目

の仕事は、深夜ひそかに怠りなく續けられてゐたのだつた。それは誰からの聲があらうとなからうと、遣らずにゐられない戸澤の本念の叫びのさせる業であつた。ただ、それを秘めて誰にも明さない理由といへば、畫いたものに對し絶えず不満が附纏ひ、自分自身に安心が保てなかつたためである。紙芝居の繪の場合には、幼童の立場から出来るだけ客觀的に描いてその中で妥協し得るものがあつたが、深夜の畫布に對してはあくまでおのれに強く立ち向はずに濟されなかつた。おのれに對する攻め方の尋常で過されなければそれだけですます描くことに不満が發見されて來て、勢ひ他に見せるなどはおろか、繪筆を握つてゐることを覗かれることすら力めて避けたく念ずる思ひは募つた。そして、友達達の攻撃の激しさを友情の厚さと解して間違ひない以上、その度に友達連の欲する繪を描いてゐる等といふ辯解を自身に必要としない、さう觀じてかへつて紙芝居の効用に無頓着な連中のためにその方の蒙を開く氣にすらなつて行くのだつた。

それは、折居の出征する一月ほど前のことだつたが、或日戸澤は思ひ出したやうに廣木多介といふ友達を訪問した。この廣木といふのは戸澤の友達仲間での年長者で、某新聞社の學藝部に勤めてゐたが、學藝部の記者といふよりは何處となく田舎牧場の萬年書記といつた顔の、武骨な中にも一種茫洋とした人柄で、一風變つた存在だつた。人中へ出てゐる風彩の上らないことで眼立つくらゐなもので、その他は格別どうといふところの無い平凡な人間の方に屬した。その武骨平凡な人柄が、何れかといへばいろいろの意味で派手な戸澤の友達の中にあつて一風變つた存在をなしてゐた譯だつたが、四五人落合つて酒を飲むやうな場合でも、廣木多介は専ら地味な立場を固執して連中の騒音には這入つて來ない例だつた。酒の座を醒めさせやうな存在の仕方では無論なかつたが、輕口に直ちに反應を示す機

轉は利かない方といつてよかつた。これを連中は不粹オヤヂと呼んで冷かし、それがまた廣木に對する連中の自然な愛稱になつてゐる感じだつた。兎に角さういふ廣木多介が、ある時、やはり酒の席で、珍らしく連中の中に割りこんで行つたことがあつた。戸澤正作が紙芝居の仕事の安きに溺れ、藝術家の魂を置き忘れたことについて攻撃を受けた折のこと、初め例のごとく黙つて廣木はそれをきいてゐるだけだつたが、だんだん攻撃が激しくなり、三四人が異口同音に、精神の腑甲斐なさにまで至り及んだ時、廣木は俄かに持つてゐた盃を音させて卓に置くと。

「矢蓋しい、あんまり小姑じみたことをべらべら吐すな。紙芝居には紙芝居だけの値打があるわい。藝術家の魂であらうがなからうが、値打のある仕事をしてゐる人間に向つてつべこべ理窟をいふのは止せ。第一うるさい。友情といふものはナ、うるさがれる性質のもんぢやアなかる。よしんば戸澤が生涯紙芝居の繪書で終つたつてそれはそれでいいぢやアないか。それで意味はあるぢやアないか。君たちに藝術家の誇りを感じしめたといふだけでも意味があるだらうが。藝術家の淋しさといふものはどういふものか、それを諸君等よく知つてゐる筈なんだがナ。」と、いかにも嘆かほしさうな表情でいふのだつたが、一座の連中は全く意外な人の口から意外な言葉の飛び出したことに度肝を抜かれた面持で、しばらくアツケラカンとしてゐるばかりだつたが、最後に嘆かほしげな表情で言葉が閉ぢられると、期せずして歡聲が擧つた。自分たちが遣り籠められたことに對する反撥等考へる邊もないくらい、不粹オヤヂの卒然たる發言が彼等を喜ばしめずには置かないのだつた。殊に言葉の結びに於ける何ともいひやうのない表情に至つては、後にその中の一人が形容した「神韻漂渺たるもの」があり、戸澤攻撃軍は一舉に粉碎された感があつた。もともと戸澤面憎しといふところに攻撃の火の手が擧と思つてゐて忘れてゐたが、一つ繪を書いてやつてくれぬか、八疊の日本間に掛けるやつだといふから何號くらゐのいいか、適當と思はれる大きさのものを頼みたいといふんだ、金の方は僕が保證する、一つ番返して書いてやつてくれまいか」と、戸澤には寢耳に水のやうな言葉だつた。鳥渡返辭に詰つた形で廣木の顔を見てゐると、廣木は續けて、

「實は僕の俳句仲間でネ、進藤といふ人がゐるんだが、その人にこの間句會の席上で會つた時、八疊の部屋に掛ける繪が欲しいが誰か心當りがあつたら世話してくれ、賣込の繪がないこともないが氣に入らないので、君の知人でいい人がゐたらその人に頼んで貰ひまいか、かういふ話でネ、そのとき何といふことなしに君のことが念頭に上つたので、晝けるかどうか知らないがかういふ男がゐるとまア無愛想な話をしたものサ、すると進藤氏のいふことが振つてゐる、君のやうな人の口からさういふはれる人の繪はきつと面白いものに違ひない、兎に角その人に頼んで見て貰つて欲しい、さういふことになつたんだ、まア一つ乗りかかつた舟だ、威勢よく漕いで見せてやつてくれよ、僕の無器用な俳句を進藤氏がまた妙に買つてくれてゐるのでひそかに徳としてことからも、不用意な言葉から君に迷惑のお鉢が廻つたことを、僕としては君の迷惑を敢て推して晝かせたい氣がしてゐるくらゐサ、つまり進藤氏の僕に對する信頼の情に専ら酬ひたい心だよ、大分利己的だが、進藤氏の言葉をきいた際まつ先に閃いたのが君の顔だつたといふことは、いはば君の運命のやうなものだ、さう諦らめて晝いてやることだネ」

戸澤は、誰にも明さない深夜の自分の姿をこつそり廣木に覗かれた氣がして變に狼狽を蔽ひ得ない感じだつた。無論廣木がそんな眞似をする筈はないが、それにしてはお互ひの仲間には世間的にかなり名の通つてゐる晝かきがある譯でな

げられたものでなく、彼を愛しその藝術的開花を促す心を以ての激勵の言葉が形を變へて表現されたに過ぎなかつたこととて、廣木多介の一同に對する言葉に針を含む筈も従つてあるわけがなく、ひたすら廣木の珍らしい發言が座興を助けて一座をこれまでにない陽氣な空氣に導いて行く役目を計らず演じたのだつた。

その廣木多介は戸澤が訪ねたときはまだ寢てゐた。いつたい戸澤はどんなに夜更しにしても朝の六時には必ず目の開く早起の性分で、目が開くとまた寢てゐられない性質で遂起きてしまふ、それで早く食事の用意に取かかり、済して新聞も読み、ゆつくり出かけて來たつもりでも廣木の家へ着いたのは九時を幾らも過ぎてゐないのだつた。廣木はまた戸澤の反對で何れかといへば朝寢の部類に屬してゐた上、前夜は勤め先で社會部の應接に頼まれて居残りをしたため歸宅が十二時後であつた由で、細君と雜談を交してゐるところへ二階から降りて來た彼の眼は、まだ寢足りなさを訴へて脹れぼつたい臉をしてゐた。別にこれといつた用があつての訪問ではなかつただけ戸澤はさういふ廣木の眼を見ると氣の毒にも思つたが、しかし上りこんでしまつた以上歸るわけにいかないし、廣木も晝過には遅くとも勤めに出なければならぬ人間だから、もう起きてゐてよい頃だと思ひ返しもするのだつた。ところが偶然その日は廣木の公休日に當つてゐたと後で知つた。

「そいつは氣の毒をした、僕は起し役を勤めたものと思つてゐたが」と戸澤は些か恐縮しながらいつた。

「眞逆、いかに寢坊でもふだんだつたら今頃はちゃんと起きてゐるサ。もつとも寒い時分は多少愚圖るがネ。」

そんな話のあと、廣木は思ひ出したやうに、「さうさう、君に會つたら話さうく、さういふ場合當然名の通つた者がまづ指名されるべきが普通であらうに、選りも選つて紙芝居の繪畫の自分を擧げたとは、廣木にどういふ魂膽あつてのことであらう、廣木にしる自分は他の仲間同様、紙芝居に潜り入つて後の晝は一枚も示してはゐない、従つて晝家としての自分の力柄がどの程度のものか廣木に知り得る術はない筈、それも拘らず、廣木がその俳句を通して信頼されてゐるといふ進藤某氏に自分の繪を薦めようとしたのはどうしたことかであらう、廣木の

人柄として他人をからかつて快を食ふことの不得手はわかつてゐる、それがわかつてゐるだけになほ戸惑ふ氣持が戸澤には深くなり勝ちだつた

「一體、どういふものを僕に晝かしたいといふのだらう、君はどういふものが僕には晝けると思つてゐるんだい」と、漸く探りを入れ、形で戸澤はいつたブラリと、ただ遊び、出たつもりも訪問が飛んでもないことに突衝つた。さういふ氣がフトした

「進藤氏からの注文は何もないさ、僕もだつてその通りだ、何でもいだらう、俳句の方で萬象悉く俳句ならざるはなしと囁いた奴があがネ、それが或る意味で眞實とすれば、萬象悉く晝ならざるはなし、といふことにもなりさうぢやアないか、しかし俳句だつて花鳥俳句が特に得意のものもあつし、生活の面を取り上げて詠む方、獨特な味ひを出すものもあつ、僕のやう、自慢にならない貧乏暮しを吹聴する外能のないのもあつアネ、どれを他人が好まうと、自分以外、自分を出せるものは絶體、ゐなからうぢやないか、晝かきの道は別にあつといへばそれまでだがネ」

「わかつた、どういふものが出來るか、そいつは僕にも鳥渡見當はつかないが、兎に角君の御好意はありがたうお受けすることにしよう、それから進藤氏の

物好きにも感謝しよう。それで、期限はいつまでといふのだらう。餘り早いのは、困るが。」

「期限は格別きいてないんだ。まア兎に角承知さしたことは僕の手柄なんだから、その手柄だけは忘れないうち進藤氏に傳へよう。ナニ、二三ヶ月かかたつていいだらうサ。」

この畫に取りかかつて間もなく折居の應召に遭つたのだつたが、折居にその細君の働き場所の相談をされた戸澤は、何を思つたかその翌日畫の注文主の進藤氏

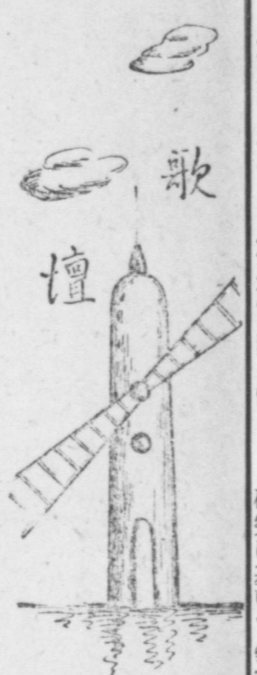
新刊紹介

民族日本歴史(新版)全五卷

白柳 秀湖 著

本史は、單なる史實の記録を主とする歴史書にあらず、史實の意義とその必然的發展の關係に獨創的な解釋を與へる事によつて、日本人の世界觀と人生觀を革新し、創造する。著者は、人類學、考古學、言語學、地理學、民族學、經濟學等近代科學の成果を驅使して、日本民族の生成、政治、經濟、宗教、藝術の成長と發展を敘し、歴史の流れに一貫する日本民族の生命力、精神力、文化、對外發展力等の根源を究め、現在、世界史上類例なき大試練に直面せる全日本人に、祖國民族に對する愛と信念と理想である。

本史によつて、日本民族の獨自性と優秀性が最もよく科學的に闡明せられたといふを得べく、從來の講壇史學家の書が、一般に親しみ難い點があつたために歴史への興味を減殺するといふ傾向があつたが、本書は、敘述の仕方、於ても、その點を克服して、充分感銘を深からしめたものがある。即ち本書の初版は昭和十年の執筆にかゝり、支那事變勃發後昭和十三年二月全五卷完成、限定版として發行せられて以來、我が國民の祖國の歴史への反省の機運を促がし、特に、所謂讀書階級と考へられてをらなかつた軍人、政界、實業界の指導層、中堅層に愛讀せられ、一般青年の間にも全國的に要求されてゐる。尙今般書肆に於ては從來の重版のため殘型破損せるをもつて書店及讀者よりの註文を謝絶して昭和十七年春以來絶版とし、著者爾後の研究に基いて多大の増補改訂を施し、



白井大翼選

神風の伊勢の渚にまかがやく光は海をのぼり來ませり 津市 勝島 精一

日射し今まともとなりぬ稻架の稻乾きつゝあり小さき音して 熊本 松野 敦夫

老らくの母とし在ればつゝましく職場を守りて慰めまをさむ 全州 吉原 正光

工場のお暗き中に白菊の花一鉢の明るさに居り 旅順 木村 敬重

木犀の花はこぼれて秋の陽の光しみじみに沁みにけり 岡山 藤原 美智子

大翼の今日は南にはばたきてたちまち傳ふ大いなる戦果を 小田原 内田 露賀

夜半をすぎ鶏なく聲のきこゆなり外には霜のふかくや置きし 宮城 志賀 宮童

つきしろに飛行機かくれりたわゝなる富有柿の梢とほしてあふぐ 岡山 青 月

白壁の水にうつれるおぼろ夜の月にかかりて雁のゆく見ゆ 新義州 玉利 白泉

必勝の意氣に敵とりたがやせし神田の稻穂色つきそめぬ 札幌 來生 忠次

明日征くと若き肩あげ月に立つ友の姿は既に神かも 同

時雨打つひさしに雀出つ入りつペン置きて居し動靜報告濟 岡山 青 月

を訪ねて行つた。そして、單刀直入、事情を説明し自分の畫の代金を前拂してくれると思つて友人折居の細君に、或期間一定の月給の貰へるやう骨折つて頂きたいことを申入れた。冒頭の或、機械製作所といつたのは進藤氏經營の會社を意味すのだが、打つてつけのやうに進藤氏がさういふ身分の人であつたことから、話は流れやうに進み、畫の報酬に別として、折居夫人は間もなく夫の留守に不安のない勤めに勵む身となつたのだつた。それが副産物に當るか知らぬが、戸澤が進藤氏に約束した畫は半年以上も経つてまだ出來た氣配もなかつた。

前版の總ルビを廢し、全部を組替へ内容体裁ともに面目を一新して讀者の要望に應へんするは意とするに足る。第一卷 建國編(B判三九五頁二圓) 古事記及日本書紀に所謂「高天原」「滄海原」がいかなる地點を稱せるかを考究し、天孫降臨より神武天皇大和建國に至る様が古代史の全貌を、南北兩民族の渾成史として描く。

第二卷 王朝編(四五七頁三圓) 天孫民族による本州經路及び先住諸民族と古代賤民の本質を論じ、國初創業期の苦難、朝鮮の情勢、漢民族、漢文化、佛教の渡來並に大化新制の社會的根柢と綱領の意義及成績を論ず。

第三卷 封建編(四七八頁三圓五〇錢) 大化新制による日本民族の政治的理念の確立、奈良・平安兩朝に亘る社會

制度の變革、東北地方への異種族の侵入と討伐及同化、武士の本質と國民經濟生活の發展と鎌倉幕府出現の必然性に至る。第四卷 戰國編(五三八頁四圓十五錢) 北條氏の公家政治と英國封建議會の本質を論じて民族と政治の特質を論じ、鎌倉時代の文化、經濟及元寇の意義、建武中興の失敗及室町幕府弱体の根柢を明にし、織田氏の興起に及ぶ。



白田亞浪選

麥あをみおほみいくさの多しづか 全州 吉原 正光

秋惜しみ砂丘にあればひと來つぐ 同

三日月の牙えに秋苑冷えふかし 札幌 ほくろ

山土産夕餉の膳に齒あり 甲府 白雲

甘蔗東擔ぎ母者に完き立ちぬ 相生 三原伊四郎

芋掘るや腹膨らしし蛙出づ 仁川 安達翠峯

めでし手にほろと散りしよ錦蔦 大阪 菊吉野鷺子

日向なる現つ寝に來ぬ赤蜻蛉 府中 曙 覽

さわやかや白き雲間に機の飛べり 小田原 内田 露賀

松籟に潮の香寒き濱なりし 同

路に垂れ黍の穂風に揺ぎをり 京城 金光英三

病監に秋光流れ入る有り難し 同

對空監視銀河大きく額に牙ゆ 全州 吉原 正光

國旗掲揚あきぐも山にねむりある 同

貨車のひびきのこりコスモスの月明き 同

今ぞ征く驅潜艇上舞ふあきつ 松本市 川紅東

龍骨の据はり草枯れ急ぐ 同

鉄を打つ響きの中の草ひばり 同

霧や幾日の風知草は骨かたき 同

兒の脚絆結んでやりぬ地梨の實 同

どうたんつ、じ色を凝らして時雨來ぬ 同

岡山 青 月

岡山 青 月



樂聖ベートヴェンの初一念

第九交響曲合唱

澤村光

偉大なる人、ベートヴェンの圓熟期の作品である、第九交響曲は第四樂章に『合唱』が挿入する交響曲である。交響曲としては珍らしい作品である。此の作品中彼ベートヴェンは耳を悪くし殆ど聞えなかつた。彼の體も漸く老衰期に入り、然し彼の崇高なる藝術的精神は遂に此の偉大なる大作第九交響曲を完成した。此の時全く彼の耳は聞えなくなつた。音楽家にとつて耳は生命である。その生命たる耳を亡くした彼がああ偉大な作品を作りあげた事は、彼の確固たる初一念の精神がなされたものである。

へた。此の力こそ彼ベートヴェンが最初より不拔の初一念を通した偉大な精神である。私等日本人もこの大東亞戰爭を完遂すると云ふ初一念を深く胸に刻み込んで邁進しなくては行けない。さすればこそ將來に偉大な輝く成果が待つてゐる。第四樂章はベートヴェンが神に感謝する念を捧げる祈りの聲である。はやこゝに達すると藝術の極致とも云ふ可きものである。ベートヴェンはこの作品を完成して全くの老衰に陥ちいつた。そして後三年して永遠の眠りに陥ちた。彼が残した幾多の藝術の香は現在燦として輝いてゐる。偉大なる哉、樂聖ベートヴェン惜しい哉。一度は第九交響曲を聞いて見ることである。第九に限らずベートヴェンの音楽を知ることである。我等に多くの何ものかを教へることであらう。

△ウインガルトナー指揮
フィルハーモニック管絃樂團並にウイーン國立歌劇場合唱團に據つた『第九交響曲合唱』が一番新しいもので優秀なものである。

南のたより

砂礫中からダイヤモンド
寶庫ボルネオ便り
鬱蒼たる榕樹の林を伐り拓いてならぶおびただしい

刑務官異動

Table of prison officer transfers. Columns include position (e.g., 刑務局長, 第一課長), name (e.g., 正木 亮, 岡田 善一), and date (e.g., 十一月六日).

Table of prison officer transfers. Columns include position (e.g., 看守長, 看守), name (e.g., 岡本 進, 吉田 太郎), and date (e.g., 十一月十六日).

Table of prison officer transfers. Columns include position (e.g., 看守長, 看守), name (e.g., 小林 惣助, 北澤 義男), and date (e.g., 十一月十四日).

刑務官異動

Table of prison officer transfers. Columns include position (e.g., 看守長, 典獄補), name (e.g., 大畑 好藏, 大畑 源一), and date (e.g., 十一月三十日).

例規

懲役禁錮ノ男少年及準少年受刑者ハ左ノ區分ニ依リ移送集容スベシ

種別	集容刑務所	移送刑務所
少年受刑者	川越少年	東京(拘)、豊多摩、横濱、千葉、水戸、宇都宮、前橋、群馬、甲府、八王子少年
(少年法第九條該當)	松本少年	戸田(拘)、長野、京都(拘)、大阪(拘)、神戸(拘)、名古屋、岐阜、静岡、滋賀、高松、高知、名古屋、津、三重、福岡、山口、岡山、広島、徳島、高松、高知、名古屋、津、三重
少年及準少年受刑者	岩國少年	新瀧、宮城、秋田、青森、札幌、帯広
	盛岡少年	網走、函館少年
	姫路少年	名古屋(拘)、京都(拘)、大坂(拘)、大坂(拘)、神戸(拘)、名古屋、徳島、高松、高知、名古屋、津、三重
	久留米少年	福岡、山口、岡山、広島、徳島、高松、高知、名古屋、津、三重
	函館少年	網走、函館少年
	八王子少年	川越少年、久留米少年、盛岡少年、函館少年

例規

懲役禁錮ノ男少年及準少年受刑者ハ左ノ區分ニ依リ移送集容スベシ

本令ハ昭和十八年八月一日ヨリ之ヲ施行ス	昭和十六年九月一日 司法省行甲第一四三〇號訓令ハ之ヲ廢止ス	長期受刑者移送方ニ關スル件
東京陸軍刑務所ヨリ普通刑務所ヘ移送可相成受刑者中長期受刑者ハ從來小菅刑務所ヘ移送相受居候處客月十七日長	期受刑者中長期受刑者ハ從來小菅刑務所ヘ移送相受居候處客月十七日長	成候ニ付ハ爾今長期受刑者一時東

追而右集容規程第一條ニ基キ長期受刑者ハ刑罰十年以上ノ者ト限定相成候條刑罰十年未滿ノ者ハ初犯又ハ累犯別ニ夫々豐多摩又ハ甲府中刑務所ヘ移送相成度尙準初犯受刑者其ノ他受刑者ノ移送ハ從前通り承相成度候

御參考ニ長期受刑者集容規程印刷物一部御送付候

收容者用主食物所要並ニ在庫

數量調提出方ノ件

本年八月分以降ニ於ケル標記ノ件ニ關シテ前月一日現在收容人員ヲ基礎トシテ翌月分所要量ヲ別紙様式ニ依リ作成ノ上毎月十日迄必ズ本省ニ到着致候様御提出相成度候

品目	官給	一日一人平均	一日分所要	前月一日現在	同上月分	在庫數量	同上月分現在	在庫數量
外國白米	合		石		石		石	
大豆	石		石		石		石	
何々								

追テ右提出後ニ於テ人員ノ異動ニ件ヒ所要量ニ過不足ヲ生ズル向ハ次月分ニテ加減掲上シ其ノ旨備考ニ附記セラレ度尙昭和十六年八月二十八日付行秘甲第一七一號及同十七年五月三十日付行甲第九三一號通牒 自今廢止ノコトニ御了知相成度申添候

備考

1、在庫數量 調査作成ノ前月末日現在ヲ調査計上ノコト

刑務官練習所入所ノ件

刑務協會ニ於テ來月七月三十一日ヨリ十月三十日迄ノ豫定ヲ以テ第三十五回刑務官練習所ヲ開設シ職務上必要ナル學科ヲ教授スル等ニ付入所ノ爲左記有守ニ對シ上京ヲ命セラレ度候

追テ入所中ハ刑務協會ヨリ應分ノ手當ヲ支給スル等ナルモ往復旅費ノ外月額旅費金拾五圓官給スルコトニ相成候間概算ノ上豫算増額方至急ニ申相成度候

新入受刑者ニ對スル身上調査ニ關スル件

行刑案進退選令第五條ニ基キ標記身上調査ノ實狀ニ徴スルニ各所中ハ該調査ノ爲兩月間拘居禁禁ニ付スルノ原則ヲ固執シ居タルノ向モ有之哉ニ候處ト調査ノ益々必要ナルハ論ヤ俟タザルノ最大限ヲ示セルニ過ギズ而モ決戰下生産増強ノ爲受刑者勞務ニ付テモ最高

精勤加給與額ノ件

自今精勤加給 最高月額十圓迄給與差支無之候ヘ共俸給豫算處理ノ都合上左記標準ニ依リ適度ニ給與方御取計相成度依命及通牒候

追アテ十四年六月行刑局長事務取扱進牒ハ自然消滅ノ義ト御了知相成度

一、勤積十五年未滿ノ者、最高五圓

二、勤積二十年未滿ノ者、最高七圓

三、勤積二十五年未滿ノ者、最高九圓

追テ右提出後ニ於テ人員ノ異動ニ件ヒ所要量ニ過不足ヲ生ズル向ハ次月分ニテ加減掲上シ其ノ旨備考ニ附記セラレ度尙昭和十六年八月二十八日付行秘甲第一七一號及同十七年五月三十日付行甲第九三一號通牒 自今廢止ノコトニ御了知相成度申添候 <td>追テ右提出後ニ於テ人員ノ異動ニ件ヒ所要量ニ過不足ヲ生ズル向ハ次月分ニテ加減掲上シ其ノ旨備考ニ附記セラレ度尙昭和十六年八月二十八日付行秘甲第一七一號及同十七年五月三十日付行甲第九三一號通牒 自今廢止ノコトニ御了知相成度申添候 <td>追テ右提出後ニ於テ人員ノ異動ニ件ヒ所要量ニ過不足ヲ生ズル向ハ次月分ニテ加減掲上シ其ノ旨備考ニ附記セラレ度尙昭和十六年八月二十八日付行秘甲第一七一號及同十七年五月三十日付行甲第九三一號通牒 自今廢止ノコトニ御了知相成度申添候 </td></td>	追テ右提出後ニ於テ人員ノ異動ニ件ヒ所要量ニ過不足ヲ生ズル向ハ次月分ニテ加減掲上シ其ノ旨備考ニ附記セラレ度尙昭和十六年八月二十八日付行秘甲第一七一號及同十七年五月三十日付行甲第九三一號通牒 自今廢止ノコトニ御了知相成度申添候 <td>追テ右提出後ニ於テ人員ノ異動ニ件ヒ所要量ニ過不足ヲ生ズル向ハ次月分ニテ加減掲上シ其ノ旨備考ニ附記セラレ度尙昭和十六年八月二十八日付行秘甲第一七一號及同十七年五月三十日付行甲第九三一號通牒 自今廢止ノコトニ御了知相成度申添候 </td>	追テ右提出後ニ於テ人員ノ異動ニ件ヒ所要量ニ過不足ヲ生ズル向ハ次月分ニテ加減掲上シ其ノ旨備考ニ附記セラレ度尙昭和十六年八月二十八日付行秘甲第一七一號及同十七年五月三十日付行甲第九三一號通牒 自今廢止ノコトニ御了知相成度申添候
--	---	---

四、最高十圓ヲ給與スルハ勤績二十五年以上ノ者ニ限ル
懲役男少年及準少年受刑者ヲ收容シ得ル刑務所ヲ別表ノ指定ス

(別表) 小菅刑務所
收容刑務所指定ニ關スル件
(昭和十八年七月九日)

標記ノ件ニ關シ本別紙ノ通訓令相成候處右ハ戰時下軍法會議處斷ノ國家總動員法違反少年及準少年受刑者増加ノ傾向ニ鑑ミ之等受刑者ヲ收容シ特殊ノ鍊成ヲ施シ以テ教化ノ徹底ヲ期セントスルモノニ有之候條御了知相成度尙收容刑務所ニ於テハ本件ノ趣旨ヲ體シ其ノ處遇上遺憾ナキヲ期セラレ度及通牒候

收容者食糧給與規程分ノ内別紙ノ通定メ昭和十八年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

(司法省行刑局行甲第一三五五號)
(昭和十八年七月九日)

第一條 收容者ニ給與スベキ飯 米麥及大豆、鵲豆、玉蜀黍其ノ他ノ適當

ナル代用食ヲ以テシ其ノ量ヲ別表ニ依リ五等級ニ分ツ

第二條 二十歳以上ノ收容者ニ給與スル飯量ノ等級ハ左ニ依ル

一、重勞作ニ就ク者 男、第一等
二、比較的重勞作 男、第二等
三、中等勞作ニ就ク者 男、第三等
四、輕勞作ニ就ク者 男、第四等
五、不就業者 第五等

第三條 二十歳未満ノ收容者ニ給與スル飯量ノ等級ハ左ニ依ル

一、重勞作ニ就ク者 第一等
二、比較的重勞作及中等勞作ニ就ク者 第二等
三、輕勞作ニ就ク者 第三等
四、不就業者 第四等

第四條 前二條ノ場合ニ於テ收容者ノ保健上特ニ必要アルトキ深田技師ノ意見ヲ斟酌シ飯量ノ等級ヲ適宜變更スルコトヲ得

第五條 免業其ノ他ノ事由ニ依リ休業スル日ニ給與スル飯量ノ等級ハ就業日ノ飯量ノ等級ヨリ一等級降下ス

第六條 病者及乳兒帶同ノ女子ノ食糧ハ保健技師ノ意見ニ基キ之ヲ定ム

收容者食糧給與規程施行ニ關スル件依命通牒

(司法省行刑局行甲第一三五五號)
(昭和十八年七月九日)

今般標記規程訓令相成候處右ハ收容者ノ主食米麥ノ節減ニ付豫テヨリ實行中ナルモ現下ノ食糧事情愈々緊迫セルニ鑑ミ聖戰完勝ノ爲一層ノ消費規正ヲ圖ル要アリ今同收容者ニ給與スル飯量ノ等級ヲ新ニ五等級ニ分テ從來ノ手續ノ簡便化スルト共ニ收容者ニ給與スル飯量ノ熱量ノ四割ハ凡テ代用食ヲ以テ補ヒ米麥トシテハ最高四合五勺最低二合三勺ヲ給スルコトトシ各等級ニ於ケル主食米麥價ハ夫々必要量ヲ維持シ利益ヲ増進スル途ニ邁進シ得ル様決定ヲ見タル儀ニ付職員並ニ收容者ニ對シテノ趣旨宣ト示テ効力ノ上一意君恩ニ奉ズルノ念ヲ奮起セシムルト共ニ一方進康保全ト相俟テ作業能率ノ増進ニ最善ノ工夫ト努力トヲ拂ヒ以テ銜後行刑ノ完備ヲ期セラレ度尙本規程ノ實施ニ當リテハ左記事項御了知相成度候

追テ右規程制定ニ付テハ大正三年三月監甲第二〇四號監獄局長依命通牒ハ廢止ト相成又監獄法施行規則第九十四條第一項第一號ノ量目ニハ依ラザル儀ニ付爲念申添候

テ現時入手至難ナル大豆ヲ特ニ農林省ヨリ供給ヲ受ケタル事情ニ徴シ之ガ使用ニ付テハ充分研究ヲ遂ゲ收容者ヲシテ長期ニ亙ル攝取ニ難惡ノ念ヲ起サシムルガ如キ事ナキ様配意スルコト

三、規程第二條ニ於ケル各勞作ノ制定標準ニ付テハ不日勞作別作業技能分類ノ例示ヲ見ル迄當分ノ間左ニ依ルコト

重勞作 從來ノ三等食糧ヲ七シ作業
比較的重勞作 從來ノ四等食糧ヲ給セシ作業
中等勞作 從來ノ五、六等食糧ヲ給セシ作業
輕勞作 從來ノ七、八、九等食糧ヲ給セシ作業

四、規程第六條ノ病者及乳兒帶同ノ女子ノ食糧ニ付テハ常食、常菜ノ外ニ大體左ノ範圍ニ依リ之ヲ定ムルコト

米麥飯、粥、重湯、食パン、パン、饅頭、葛湯、鵲豆、牛乳、煉乳、刺身

五、規程別表ニ掲ゲタル麥ノ量ハ壓搾麥ヲ示シタルモノニシテ之ヲ原則トスルモ若シ挽割麥ヲ使用スル場合ハ左ニ依ルコト

一、等 二九四瓦
二、等 二六七瓦
三、等 二〇七瓦
四、等 一六八瓦
五、等 一六八瓦

六、食料表整理ニ當リテハ當分食料表及獻立表様式第五ニ依ルコト

七、收容者ニ給與スル副食物ノ獻立並ニ調理ニ付テハ動モスレバ單調粗雜ヲ免レザルヲ以テ出來得ル限り新鮮ニシテ且變化ニ富ム副食品ノ補給ニ努メ副食物藥價ノ全國平均一人一日約三五〇カローリノ標準値ヨリ低下セザル様特ニ注意ヲ用フルコト

八、收容者ノ榮養並ニ衛生状態ニ付テハ特ニ慎重ナル注意ヲ拂ヒ榮養失調ノ發生或ハ作業能率ノ減退等戰力ヲ障礙スルガ如キコト無カラシムル様萬全ヲ期スルコト

等級	一日ノ飯量		
	米	麥	量
一等	五八瓦	二八五瓦	三二七瓦
二等	三三瓦	二五五瓦	二九一瓦
三等	〇〇瓦	二二二瓦	二五五瓦
四等	七四瓦	一八九瓦	二二六瓦
五等	三五瓦	一四七瓦	一六八瓦

備考 一、代用食二種以上ヲ混用ストキハ各其ノ量目 右ニ準ス
二、其ノ他ノ代用食ヲ用フル場合ノ量目ハ別途訓令ヲ以テ之ヲ定ム
三、麥ハ壓搾麥

等級	一日ノ飯量
一等	四三〇瓦
二等	三三五瓦
三等	三九〇瓦
四等	二八五瓦
五等	二二〇瓦

備考 麥ハ壓搾麥

一、規程第一條ニ掲記ノ適當代用食ナキ場合ニ於テハ監獄法施行規則第九十四條第三項ニ依リ司法大臣ノ認可ヲ受ケ米麥ノミヲ以テ左表ニ依リ給與スルコト

一、規程第一條ニ掲記ノ適當代用食ナキ場合ニ於テハ監獄法施行規則第九十四條第三項ニ依リ司法大臣ノ認可ヲ受ケ米麥ノミヲ以テ左表ニ依リ給與スルコト

投稿規定
(守 嚴 日 二 月 毎 切 締)

刑務所だより
用紙 四百字詰原稿用紙
字數 一千六百字以内
送先 東京都麹町區霞ヶ關一丁目一番地 刑務協會「刑務所だより」係宛

讀者の聲
用紙 四百字詰原稿用紙
字數 一千字以内
送先 東京都麹町區霞ヶ關一丁目一番地 刑務協會「讀者の聲」係宛

俳壇・歌壇
課題 隨意
用紙 官私製葉書
俳句は一葉に五句迄 短歌は三百迄
送先 東京都麹町區霞ヶ關一丁目一番地 刑務協會 俳・歌壇宛

寄稿家紹介

正木 亮 刑政局長
林 隆行 東京豫防拘禁所長
安達勝清 陸軍司政長官
佐藤民實 作家
伊集院 哲 評論家
原 祐三 早大講師
石塚友二 作家

編輯後記

▲カイロ會談に日本の無條件降伏を討議し南太平洋ノ病院船ぶえのすあ丸九丸を撃沈し敵米英の迷蒙ぶりは愈々甚だしきものがある。彼等には日本のあり方か夢にもわからぬ。例へば體あたりの白癡精神に付てもたが榮養不良の肺病やみの喧嘩にするの地位にしか考えてみないのである。思ひ上つた彼等の獨善主義をたたくつす唯一の道は實力による。好きの貧民共が絶望的に生命を粗末にするの地位にしか考えてみないのである。思ひ上つた彼等の獨善主義をたたくつす唯一の道は實力による。好きの貧民共が絶望的に生命を粗末にするの地位にしか考えてみないのである。思ひ上つた彼等の獨善主義をたたくつす唯一の道は實力による。

一 冊 (税共) 金三十錢
六 冊 (税共) 金一圓八十錢
十二冊 (税共) 金三圓六十錢

●御注文は總て前金のこと
●御送金は郵便爲替ならば司法省郵便局取扱にて拂込のこと、但しなるべく振替を利用せられたし、口座は東京二五〇五九番刑務協會とすること
●御注文の際は必ず送付先明記のこと、從つて轉居の際は新舊住所を御届け下され

編輯 澁谷善藏
發行所 刑務協會印刷所
印刷所 日本出版配給株式會社
發行所 刑務協會印刷所

